

### 「神様のリサイクルがある」

宮崎希望教会 森 正行



「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう。」そこで、イエスはパンを取り、感謝してから、すわっている人々に分け与え、また、さかなをも同様にして、彼らの望むだけ分け与えられた。

ヨハネ6・9、11

「役に立たない」と弟子たちが思ったものにイエスは目を向け、受け取り、父なる神に用いていただくことを感謝し、人々の必要のために用い、神の栄光を現しました。

弟子たちはわずかなパンと魚が、神と人々に役立つとは思いませんでしたので、自分から神の前に差し出すこともしませんでした。

私たちも無意識のうちに合理的思考で、役に立つか立たないかを判断していて、役立つと思うものは神に用いられるように祈り、役に立たないと思うものは、神の前に差し出すことも祈ることもしていません。しかし、「役に立たない」と人が思うもの・人・出来事を神は用いた記録が、聖書には

沢山あります。

今日、多くの青少年たちが、容姿や能力、成績、弱さ、人からの評価、過去の失敗や恥じたことなど、様々な劣等感を持ち、後悔し、恐れ、隠し、生きづらさに苦しんでいます。

これらのものをどうしていいのかわからないのです。けれども実は、これらのものこそ、神の栄光が現れ、苦しむ人々のための「五つのパン」、つまり「役に立つもの」なのです。

イエスがしたように「神の栄光と人々のために用いてください」と祈り、神にささげる単純な手段があったのです。その結果は人が想像もしない驚くことが始まりました。

私たちが青少年たちに紹介し、一緒に取り組んでいく人生観はこれです。

そのためには、彼らから「教会の人なら何でも話せる」と言われるような環境作りが必要です。お説教や正論を説いては、誰も心の苦しみや本心を打ち明けないからです。

さらにそのためには、まず私たち教師が、今ある弱さや劣等感、不安や恐れ、「役に立たない」と思ってきたことを神と友の前に打ち明け合い、「用いてください」と一緒に互いに祈り合うことから始めることです。神は喜んで受け取りリサイクルされるでしょう。

# 牧羊者

## 目次

|                      |    |
|----------------------|----|
| 巻頭言                  | 1  |
| 目次                   | 2  |
| カリキュラム               | 3  |
| 教師養成講座「若者への宣教」       | 4  |
| ～ 真実な交わりと、聖書的生き方 ～ ① | 9  |
| キリストの譬話              | 10 |
| 7 ～ 11               | 18 |
| 12                   | 30 |
| クリスマス・年末             | 51 |
| 牧羊ひろば（福岡教会）          | 87 |
| 「牧羊者」のご購読・ご利用について    | 90 |
| おわりに                 | 90 |

### 〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について  
 こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教  
 団出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出  
 版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子  
 どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以  
 上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）

●キリストの救いを知る

マルコ 15

●キリストの譬話

| 行事    | テーマ       | 聖書          | 暗唱聖句  |
|-------|-----------|-------------|-------|
| 10月7日 | 親切なサマリヤ人  | ルカ 10・25～37 | 同 36節 |
| 14日   | 愚かな金持ちの譬  | ルカ 12・13～21 | 同 15節 |
| 21日   | 建築と戦いの譬   | ルカ 14・25～35 | 同 27節 |
| 28日   | 迷子の羊      | ルカ 15・1～7   | 同 4節  |
| 11月4日 | 放蕩息子      | ルカ 15・11～24 | 同 24節 |
| 11日   | 不義な裁判官    | ルカ 18・1～8   | 同 1節  |
| 18日   | パリサイ人と取税人 | ルカ 18・9～14  | 同 13節 |

●クリスマス・年末

|        |                    |                |          |
|--------|--------------------|----------------|----------|
| 11月25日 | 収穫感謝<br>人やされた人の病人  | ルカ 17・11～19    | 同 15・16節 |
| 12月2日  | マリヤへの受胎告知          | ルカ 1・26～38     | 同 38節    |
| 9日     | マリヤの讃歌             | ルカ 1・39～56     | 同 46・47節 |
| 16日    | 馬小屋で生まれたイエス        | ルカ 2・1～7       | 同 7節     |
| 23日    | クリスマス<br>救い主誕生の知らせ | ルカ 2・8～20      | 同 11節    |
| 30日    | 年末感謝<br>すべてに感謝     | イテサロニケ 5・16～18 | 同 18節    |

# 若者への宣教

## 「真実な交わりと、聖書的生き方」①

キリスト者学生会（K G K）副総主事・事務局長

荻窪栄光教会勸士

矢島志朗



私は学生時代に信仰を持ち、荻窪栄光教会で受洗し、行政機関やN G Oでの働き、神学校での学びを経て、二〇〇六年よりキリスト者学生会（K G K）の主事として学生伝道の働きにたずさわっております。また、荻窪栄光教会では勸士の奉仕、及び青年会担当として活動を励まし、サポートをさせていただいています。今までの取り組みをとおして教えられてきたことを踏まえて、二回にかけて「若者への宣教」について述べさせていただきます。

### 一、若者の声―学生伝道の現場から―

K G Kの働きの中心は、学生達が遣わされている「学

校」という場所で聖書を学び、祈り、伝えていくことです。中四国地区の担当として学校を回る日々の中で、学生たちが自分の弱さや欠けで苦しむ姿とも向き合われてきました。そのテーマは救いの確信、家族や友人との関係、恋愛、就職、罪とのたたかいなど、様々でした。学生たちと数年かけて、お互いの悩みを安心して分かち合えるような真実な「交わり」を深めることをテーマに活動しました。この期間を含め、私が担当した六年間で、学生たちは以下のような興味深いテーマを時間をかけて話し合い、掲げていきました。

二〇〇七年 アイムシユタイン（主体）

「聖書が教える神への応答」

二〇〇八年 励まし合いたいけん

「祈りの輪から学内へ」

二〇〇九年 神交生活「聖書読んで自固まる」

二〇一〇年 つらかったら言ってね

「だってキリストのからだだもん」

二〇一一年 あゝいゝ交わり 私的心を主の前に

二〇一二年 交わり建てたい共同体

ある年は「交わり」について三日間の合宿を行い、とにかくみんなが本音を出せるような工夫をしました。通常の講演以外に「交わりタイム」という企画を設け、「私は人からよく●●と言われますが、本当の自分は▽▽です。」という穴埋めを下さい、というワークや、いつもよりは思い切ってふみこんで分かち合いをしよう、という時間を設けました。「実は、自分はとてもクリスチャンとは言えない。」「自分は絶対に伝道したくない」という告白や、「清水の舞台から飛び降りる思いで、自分の弱さを分かち合った。」と語るメンバーもいました。その交わりには、喜びがありました。

ある学生を訪問して一対一で学びをしたときに、聖書

のある箇所を読んで率直に「何を言っているのか、よくわからん」と感想を言ってくれた学生がいました。私が「うーん、そうだよね。難しいよね」と言って、ああでもないこうでもないと言ひ合ううちに、だんだんとその箇所を通して、神様が自分に語っている事柄に気付いていくことがありました。

またある時には、初対面のクリスチャン学生にK G Kの働きを紹介し、「聖書を一緒に読んでみよう」と言っている箇所を開いたところ、その学生が神様の愛の深さに心を打たれて、「これだけ愛されていながら、友人にクリスチャンであることを証しできていない自分が、神様に申し訳ない」と涙ながらに語り出す、といったことがありました。

また、次のような経験をしたこともあります。

地区キャンプのための準備委員とのミーティングで、「今の自分たちの現実の中で気になること、疑問に思うことや、突き詰めて考えてみたいことを中心に、キャンプのテーマを考えてみよう」と話し合ったところ、クリスチャンホーム育ちの準備委員全員が口をそろえて「生きる意味が分からない」と語り出しました。これには驚

きました。「苦しいことがたくさんあって、クリスチャン人生はただ天国行きの切符をにぎりしめて、地上の日々を耐え忍んで生きるだけなのかと思ってしまふ」という声がありました。その真実な告白をもとにテーマづくりをして行われた合宿は、彼らにとつてとても意義深い経験であつたと思います。

翌年のキャンプでは、ヤコブの生涯の箇所からのメッセージがありました。神様に碎かれるというのは「砕いて下さい」と出ていくのではなく、ありのままの姿をむき出しにして「自分はこうしたいんです!」と言つて神様につつかつていくときに本当の交わりが生まれて碎かれるのだ、と講師から語られて、学生たちがとても励まされました。「そうか!」と思つた。自分ももつと神様の前に正直に、自分をさらけ出していきたい」という感想が続きました。ふりかえってみると私自身も、学生時代にうまくいかないことがあつた時に、思い切り祈りの中で神様に感情をぶつけたことがあり、その時になぜか、かつてない平安を経験したことがあつたのを思い出しました。

このような取り組みを重ね、クリスチャン学生が自分

たちの現実をきちんと見つめて取り組む姿や、「みことば」と「交わり」にじかに触れるなかで、救われた未信者の学生もいました。

## 二、若者の声―教会の青年会において―

青年会のリーダーたちと、何を中心に活動したらよいか話し合つたことがありました。その時に浮かんできたキーワードは、「親睦」と「聖書の生き方」でした。前者は青年のニードとしてよくわかりますが、後者が印象的でした。あるメンバーが「クリスチャンホームに育ち、親について教会に來続けていても、本当の自分の信仰を持つに至つていない人は多いと思う。だから世の中で負けてしまつたり、選択の自由が与えられるようになると、教会から離れていつてしまふ。聖書の理解に自信がなくても、いまさら恥ずかしくて基本的な質問がしづらかつたりもする」と語りました。

その現実をふまえて四年前から、グループでの聖書の学び、救いの全体像の学び、あるいは「働くこと」「恋愛・結婚」などの具体的なテーマの学びを中心に、自由に思いを述べ、折り合える場を作るよう心がけています。未

信者の青年も加わることがありますが、この「学び」と「交わり」のなかで宣教が進められています。

### 三、自分自身が取り扱われていく

このような取り組みは次々とアイデアが与えられて、順調に行われてきたわけではありません。KGKで学生たちと「交わり」について真剣に取り組み始める直前は、私自身の働き方の深い反省、転換が求められる時期でもありました。自分の「大人」としての経験値を尺度にして、てきばきと事を進めた方がより良い活動ができると思います、ある時は叱咤をしつつ学生たちを指導していました。しかしそれは、彼らに弱さや葛藤、悩みがあるという現実には寄り添う姿勢に欠けたものでもありました。ある時に中心メンバーの一人から「そんなにがんばれませんか」という叫び声を聞き、自分の至らなさに直面させられました。学生のつらさや叫びに気づけていなかった、学生同士本音を語り合う交わりづくりを励ませてこれなかったという現実にはショックを受け、相当落ち込み、悔い改めました。それから主のあわれみにより、以前よりはもっと学生の現実には寄り添うように、自分の姿勢も少し

ずつ変えられていったように思います。私自身の献身の歩みにおいて、なくてはならない経験でした。そして時間をかけて丁寧かつ真摯な対話を心がける中で、一つ一つの取り組みが導かれ、交わりが深められていきました。

### 四、真実な交わり

若者の声を聞いて感じてきたことは、彼らのなかに、「本当の自分を出し、本気で分かち合い、一緒に神様を見上げていく交わりがほしい」という深い叫びがあることです。かざらない本当の自分で、安心して神と人の前に出られる場が必要です。そのためには、一緒にみことばを読んで分かち合うことが、大きな助けになることを体験してきました。「聖書はこう言っている、だけど自分の本音はこうだ。こんなに弱く、恐れも傷もある。けどまたみことばに戻って、みことばがこう言っているのだから、それを受け取ってともに歩んでいこう」という励まし合いの積み重ねが大切であると思います。

私自身の年齢は四十代後半ですが、十年程度を区切りとして、人生には「ステージ」というものがあるように思います。救いの完成は約束されていますが、地上の生



涯で遭遇するテーマは、人生のステージごとに変わっていきます。変わらない神の言葉も、私たちの関心、悩み、体力、負うべき責任などが変わるごとに、違った響き方をします。本質は変わらないとしても、人生のステージごとに、届きやすい言葉や必要な励ましや慰めもまた変わってきます。

若者には、若者ならではの聖書の読み方があります。それぞれの現実が届くようにみことばが語られ、分かち合われることが大切です。そのなかでこそ、現実に向き合う力が与えられ、生きた証の言葉が生まれていきます。等身大の自分でいられるなかでみことばに聞き、「福音に生きる」とは決して律法的で堅苦しいことではなく、かといってゆるめられているから何をしてもいいわけでもなく、さまざまな経験をおして少しずつ成熟していくものであり、その歩みのなかにこそ真の喜びがあることをともに体験していけることが大切なのだと思います。

若者たちのモデルとして、自分自身も悩みながら成熟に向かつて旅を続ける大人たちの存在が大切です。完成されたモデルが必要なのではなく、人格的な交わりを大切にしながら、罪ゆるされた罪人として、あわれみによって生

かされているという意味でのモデルの存在が求められます。パウロから教会への勧めに、「あなたがたが、わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい。そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであらう」(ペリピ4・9)という言葉があります。知識として学ぶだけではなく、聞いて見て、人格的な触れあいのなかで若者たちが教えられ、励まされる交わりが必要とされています。

若者たちは、教会の希望です。彼らが救われ、成長し、いきいきと主に仕えていけることが、明日の教会の建て上げにつながります。若者たちの「今」「現実」を真摯に見つめることから、若者への宣教は始まります。彼らが福音の豊かさを深く知り、直面する課題に対して聖書的な世界観を持つて向き合い、日々の歩みの全てが主のご計画の中にあるという喜びと希望をもつて歩めるように、励まし仕えていきたいとします。そして、希望をもつにする若者たちの交わりのなかで起こる、「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」(使徒2・47b)のみことばの成就を、共に見させていたきたいと思っています。



# 聖書 ルカ10・25〜37 テーマ 親切的なサマリヤ人

## 序論

(福井文彦)

この箇所はルカだけが記している有名な「よいサマリヤ人のたとえ」です。ある律法学者が「イエスを試みよう」として「何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」と質問しました。そこでイエスは、「律法には、永遠の命とは神への愛と隣人愛であると記されている。あなたは、助けを必要としている人の隣り人となりなさい」と教えられたのです。

## 一、律法の教え

律法学者とは律法の教師とも呼ばれましたが、パリサイ人の中にもサドカイ人の中にもいました。彼らの大部分の者は、宗教の外面的な形式に注意を払う偽善者であり、心の中にはいささかのへりくだりの思いもなく、神を知りたいという願いも全くありませんでした。彼らは、格別に貧しい人々に重荷を負わせ、助けようなどとは少しも考えませんでした(ルカ11・45〜52)。

イエスは、ある律法学者の「何をしたら永遠の生命が

受けられましょうか」との質問に対して、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」と質問されました。彼の答えは正しく、旧約聖書の教えを知っていました。神を愛し隣人を愛することであることは彼には明らかでした。

そこでイエスは「そのとおり行いなさい」と律法学者にお迫りになりました。彼は自分がこれらの律法を破り、自分の隣人愛について、愛の不足を感じていたのです。しかし、彼は悔い改めず、律法の前に正しい者であることを立証しようとしていました。それで、彼は、「自分の立場を弁護しようと思って、イエスに(では、わたしの隣り人とはだれのことですか」と逆に問い返したのです。

## 二、よいサマリヤ人

このような律法学者の逃げ口上に対して語られたのが、よいサマリヤ人のたとえです。

エルサレムからエリコへ向かっていたユダヤ人が強盗に襲われ、半殺しにされ倒れていました。そこを祭司が通りましたが、倒れている人の向こう側を通って行きませんでした。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けたのです。しかし、エルサレムの神殿での奉

仕を終えて帰る途中ですからその心配はなかったはずで  
す。次にレビ人が通りました。彼は倒れているユダヤ人  
に気づいたのですが、祭司同様に見て見ぬふりをして、  
向こう側を通って行きました。

彼らは半殺しにされ倒れている人を助けることより  
も、律法によって求められている儀式的なきよめを守ろ  
うとして、律法が真に意図する愛に生きようとしません  
でした。

ところが、強盗に襲われ半殺しにされたユダヤ人に本  
当に親切にしたのはサマリヤ人でした。ユダヤ人とサマ  
リヤ人とは敵対関係にありました。それにも関わらず、  
サマリヤ人は「彼を見て気の毒に思いました。それで  
この危険な場所で立ち止まって十分な介護をし、自分の  
家畜に乗せ、宿屋に連れて行き、そこで介抱したのです。  
その上、宿料二デナリを払い、それ以上の必要経費があ  
れば、それも支払う約束をして旅立ったのです。

### 三、隣り人

イエスはよいサマリヤ人のたとえを話し終えられる  
と、律法学者にお尋ねになりました。「この三人のうち、  
だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」と。

すると、彼は「その人に慈悲深い行いをした人です」と  
答えました。そこで、イエスは「あなたも行つて同じよ  
うにしないさい」と、愛の実践を命じられたのです。

ある人は隣り人とは助けを必要としているユダヤ人の  
ことであると考えられるかもしれません。しかし、イエスは  
そのような意味でたとえをお話しになったものではありま  
せん。よいサマリヤ人が隣り人なのです。これが律法学  
者に対する答えです。

律法学者は、他の人を愛する時、愛する価値のある隣  
人はどこまでの人か、その愛する義務と限度を教えてほ  
しいと求めたのです。それに対してイエスは「愛の対象  
には限度がなく、敵であっても隣り人となって愛するこ  
とである。あなたが愛の心を持ち、あなたが助けること  
ができるすべての人々の所へ出かけて行く隣り人になれ  
るかどうかが問題なのである」と教えられたのです。

### 結論

私たちクリスチャンは、聖霊によって愛に満たされ隣  
り人となるべきです。そして、助けを必要としている人  
であればだれにでも近づき、助けることができる者とな  
りましょう。

## 研究資料

(小平徳行)

このたとえ話から、私たちが愛することによって隣人になることを学ぶ。

## テキスト

25 イエスを試みようとして 教えてもらうためでなく、どのように答えるかを見てイエスの知恵を試すため。何をしたら永遠の生命が受けられましょうか 永遠の生命を受け継ぐことは、当時のラビたちにとって一般的な神学的問いであった。「何をしたら」と問うているところから、律法学者は、行ないによる救いを考えており、神の恵みを理解していなかったことを示している。

27 律法学者は申命記6・5とレビ19・18を引用して答えた。イエスも一番重要な律法は何かと質問された時、同様に答えていることから(マルコ12・29-31)、この律法学者は明らかに律法に対して深い洞察をもっていた。

29 自分の立場を弁護しようと思って この律法学者は確かに律法に通じていたが、実行する事に欠けていた。そのため、自分を弁護しようとした。隣り人 ラビたちにとってはユダヤ人同胞を意味した。レビ19・18では、

明らかにこの意味で用いられているが、同34節では、その地にいる他国人にも当てはめられている。

30 ある人 ユダヤ人であると考えてよい。エルサレムからエリコに下って この区間は約28キロメートルあり、標高差約千メートルを下る道で、ひっそりとした砂漠や岩地を通る。この道の強盗は有名で、特に一人で旅をする者を襲った。途中にマアレー・アドラーム(赤い坂)と呼ばれる場所があり、伝説ではそのあたりに強盗が出没して多くの血が流されたため、土地が赤くなったので、そう呼ばれているという。

31 ひとりの祭司が…この人を見ると、向こう側を通って行った 祭司は倒れている人の向こう側を通った。彼は律法にあるように、死体によって汚れることを避けるためと思われる(レビ21・1)。しかし祭司は「下つてきた」とあるように、エルサレム神殿での奉仕を終えて帰る途中であった。したがって実際は宮での務めを果たせなくなるといふ心配をする必要がなかった。もし明らかに生きていると判断できれば憐みを優先させるが、ほとんど死んでいるように見えたので、祭司は危険を冒そうとはしなかった。

32 レビ人 祭司同様に汚されることを避けようとした。祭司とともにレビ人は、ユダヤ教の聖職者として率先して律法を実行すべき人として登場している。それゆえにこの両者の姿は、律法によって求められている儀式的なきよさを守ろうとして、律法が真に意図する愛をないがしろにする律法主義の真相を明らかにしている。

33 サマリヤ人 祭司やレビ人、律法学者が軽蔑し、差別した民でユダヤ人は彼らとの接触を避けた。ユダヤ人とサマリヤ人の間にある敵意の歴史から見て、襲われたユダヤ人を助けることが最も期待できないのがサマリヤ人であった。しかし襲われたユダヤ人を助けたのは、このサマリヤ人であった。気の毒に思い(ギ)スプランクニゾマイ) この言葉は「はらわた」から来ており「はらわたを突き動かされる」という意味である。サマリヤ人の行動のすべては、この思いのなせるわざであった。この言葉は、放蕩息子の父親(11月4日分)の「哀れに思つて」(ルカ15・20)や、キリストがあわれみを示される時に使われている(マタイ9・36、14・14、15・32、20・34など)。したがって、このサマリヤ人の中にキリストを読み取ることが出来る。

34 35 オリブ油とぶどう酒 オリブ油は傷を洗うため、ぶどう酒は傷口の消毒のためであり、両方を混ぜて軟膏として用いられた。自分の家畜に乗せ つまりサマリヤ人自身は歩かなければならなかった。宿屋に連れて行って介抱した このサマリヤ人は、襲われた人を宿屋に連れて行く事で自分の義務を果たしたとは考えず、続いて彼の世話をした。デナリ二つ 二日分の労賃だが、当時の食費から推計すると宿賃としては高額であった。さらに不足分の支払いまで約束した。彼は自分のできるすべてをしたのである。

36 だが隣り人になったと思うか 隣人を愛するとは、愛するべき価値のある「隣人はだれか」と愛の対象を制限することではなく、たとえ敵であっても「隣人になって」愛することであると教えている。そのためにはキリストの愛に満たされることが必要である。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・The IVP Bible Background Commentary: NT. Leon Morris, Luke (The Tyndale New Testament Commentaries).

## 聖書

ルカ10・25〜37

## タイトル

親切なサマリヤ人

## 暗唱聖句

この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。

ルカ10・36

## 目標

助けを求める人々に、よき隣人として近づき助ける者となる。

## 導入

(松浦みち子)

二〇一八年6月、東京発の新幹線で大変なことが起こりました。突然、座っていた男の人がナイフを持ち出し隣りの人を切りつけ、座席の反対側の人も切りつけました。その騒ぎを聞いた梅田耕太郎さんはいてもたってもおられず犯人を止めようとして亡くなりました。悲しい事件ですが、隣人を助ける勇氣ある行動が人々の心に刻みつけられる出来事となりました。

## 隣り人とはだれのことですか？

イエス様の人々にお話しされるのを、じっと聞いていたある律法学者が、イエス様を試そうといういいわるな心をもって質問しました。「先生、何をしたら永遠の生

命を自分のものとして受けることができるでしょうか」。

イエス様は「聖書には何と書いてありますか。あなたはどうか読んでいますか」と言われました。すると、律法学者はすぐに「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』、また、『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』と書いてあります」と答えました。「あなたの答えはすばらしい、百点です。その答えのとおりに行なさい。そうすれば命を受けることができます。」と言われました。すると、律法学者は心の中で「ふん、そんなこと言われなくてもわかってるよ」と思っていたので、続けて「では、わたしの隣り人とはだれのことですか？」と尋ねました。実は、律法学者の考えていた隣り人とは、自分の周りの家族や身近な自分の仲間のことだけで、それ以外の人は隣り人などとは考えていませんでした。

## よいサマリヤ人のたとえ話

イエス様は彼の心を見抜きたとえ話をされました。

ある人がエルサレムからエリコに向かう途中、寂しい岩だらけの山道を急ぎ足で歩いていました。「さあ、暗くなつたらたいへんだ！ このあたりは強盗がよくでる

らしいからなあ」。そんなことを思いながら歩いていると突然岩陰からワァーと剣や棒を振りかざした男たちが飛び出してきて、「おい、命が惜しけりや、金を出せ！」と叫びながら、旅人を襲い、棒でボカボカ殴ったり、ドンドンと蹴飛ばしたり、着ている服まで何もかも奪って逃げて行きました。「たっ、たすけてえ!」、旅人は「ウー、もうだめだ!」ドタァと倒れて、起き上がる力もありません。死んだように倒れているところに、運よく神殿で神様に仕えている祭司が通りかかりました。「おやつ、だれか倒れているぞ。強盗にやられたんだ!」「アー恐ろしや、恐ろしや。」倒れている旅人に気付きながら、見ないふりして道の反対側をすたこらさつさと駆けて行ってしまうました。次に、レビ人がやってきました。この人も神様の働きをしている人です。「あつ、強盗にやられたな、たいへんだ!」この人も、旅人に声もかけずに道の反対側を逃げるように走って行ってしまいました。「あーあ」旅人は体も心もズキズキ痛み、「もう、ここで死んでしまうのかなあ」と力なく横たわっていました。その時です。かすかにカッポカッポというロバの足音が聞こえてきました。その音はだんだん近付き、旅人が倒

れているのを見つけると、急いで駆け寄り「こりゃあ、たいへんだ!」と、傷を消毒し、オリブ油を塗って包帯し、自分のロバに乗せて宿屋まで傷ついた旅人を運びました。その人はサマリヤ人でしたが、一晩中看病し、翌朝早く、ご主人にお金を渡して「この人をお世話してあげてください。費用が余計にかかったら、帰りがけに支払いますから」と言って出かけて行きました。

### 隣り人になる

イエス様は、話し終わると、「この三人のうち、だれが隣り人になったと思うか?」と尋ねられました。律法学者は「強盗に襲われた旅人を助けてあげた人です」と答えました。「そうです。あなたも行つて同じようにしなさい」と言われました。当時ユダヤ人とサマリヤ人は仲の悪い間柄でした。しかし、助けたのはサマリヤ人でした。あなたの隣り人とは、あなたの助けを必要としている人のことです。隣り人になることはたやすいことではありません。しかし、イエス様を信じるとき私たちの心に神様の愛が注がれ、隣り人を愛するやさしい心が与えられるのです。よき隣り人になれるよう、祈りましょう。

♪小さいわたしの♪(ホ14)



# 聖書 ルカ12・13～21 テーマ 愚かな金持ちの譬<sup>たとえ</sup>

## 序論

(山田和幸)

イエスは偽善を戒め、日常生活のことで心配するのではなく、神の国を求めることが大切だと説いておられました。その最中に、財産問題の調停話を頼みに来た人があったのです。この人にとって財産問題は、神の国について教えるラビにこそ解決されるべき、重要課題に思っていたのです。

お金こそ最も大切なことなのでしょうか？ お金で幸せが買えるのでしょうか？

## 一、財産が魂を養う？

イエスは、ここでも譬えで教えられました。命と魂の安全が、財産で保障されると誤解している金持ちの話です。

実は、備えをすることは、聖書的なことです。創世記に記されたヨセフの話は有名です。ヨセフは七年間の豊作の内に、七年間の飢饉の蓄えをしたのです。また、「子

供は親のために財をたくわえて置く必要はなく、親が子供のためにたくわえて置くべきである」(Ⅱコリント12・14)というみことばもあるように、将来のための蓄えは、大切なことです。

ただ、「もし主の御心ならば」という姿勢が必要です。「よく聞きなさい。『きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一か年滞在し、商売をして一もうけしよう』と言う者たちよ。あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ。…むしろ、あなたがたは『主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう』と言うべきである」(ヤコブ4・13～15)とある通りです。

確かにお金は大切なものです。必要なお金が不足していることは大変なことです。ただ、充分な財産があれば、魂に本当の平安が満たされるわけではありません。

## 二、魂は誰のもの？

この金持ちが、蓄えたこと自身が問題だったのではなく、その姿勢に問題があったのです。この金持ちの何が間違っていたのでしょうか。何故愚かだったのでしょうか。

この金持ちは大豊作を得た時、神の御手を見るのでは



なく、自分のことだけを見ました。日本語の聖書では充分には訳出されていませんが、「わたしの作物…、わたしの倉…、わたしの穀物…、わたしの食糧…」と、ここでは「わたし」が非常に強調されています。この金持ちの自意識の強さが表されているのです。彼の興味は自分のことだけでした。

では、彼の魂は彼のものだったのでしょうか。彼が充分な蓄えをしたことで、彼の魂は安逸を約束されたのでしょうか。答えは、いいえです。人の魂を支配しているのは、いったい誰なのでしょう。神様だけが人の魂を支配し、人の命を決めておられます。その神様が、富を得た人間に何を求めているのかを見ることが大切なのです。

### 三、神に対して富む

イエスの時代のユダヤ人もそう考えていたように、物質的な祝福も、神様が与えてくださったものです。富そのものは、善でも悪でもありません。ただ、富を得たときに神のことを考えるか、自分自身のことを考えるかで、益になるか害になるかが分かれるのです。〈神に対して富む〉むことが必要です。

この金持ちが、自分の為だけに財を蓄えることを考えたのが、神の前には貧しいことだったのです。そうではなく、神のために用いること、清い使い道を考えれば良かったのです。ジョン・ウェスレーは「多く稼げ、しっかりと蓄えよ、大胆に献げよ」と言ったそうです。それが、私たち神の前に生きる者の、富に対する考え方です。

新約聖書には、「天に宝を」という表現が繰り返されています（マタイ6・20、19・21、ルカ12・33、18・22）。自分のために蓄えるのではなく、人のためにきよく使うことこそが、すなわち天に宝を貯えることになるのです。

### 結論

この譬えを読み解く鍵は〈あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持つていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである〉です。イエスは、貪欲に注意するよう教えられたのです。その人の命が財産によらないだけではありません。宝のあるところにその人の心もあるからです（34）。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

13 先生 原語では呼格が用いられており、主に對する呼びかけの言葉であることが分かる。これは、ユダヤ教で一般に行われていた「ラビ」という律法学者への呼びかけに対応する。この群衆のひとり、イエスをラビのひとりとして理解し、そのイエスに自分の家族の遺産問題の調停人としての役割を期待したのであろう。当時のユダヤ教のラビは、その地域社会の家庭民事の調停者の役を兼ねていた。

14 伝統的なラビの役割としては、このようなリクエストに対して直接答えるのを常としていたようである。しかし、イエスはこれまでのようなラビの役割を超えて自身の究極的関心を開陳する。

15 ここから人々に対する警告が始まる。

**貪欲** 通常の金銭欲よりも包括的であり、なおかつ強烈な言葉である。たとえばコロサイ3・5では、この語は偶像礼拝と同一視されており、神の代わりに物を拝む事と同一視されている。あるいはⅡペテロ2・3において

は、自分の地位を利用し、仕えるべき人から逆にむさばり、同胞を、利益を得る相手と見なして、仕えるべき神の子と考えない罪とされている。この個所では、人生の価値は所有する物の数にあると考える人が持つ罪であり、物を得ることだけを欲し、与えることを決して考えない人の持つ罪であると考えられる。

16→20 ここから、いわゆる「愚かな金持ち」のたとえ話が始まる。ハンターは、通常このたとえ話は貪欲に対する「恐るべき警告」として理解されてきたと前置きし、その上で、この譬は「時」の譬であつたという方が更にふさわしいと述べる。神の国に生きる民は、終末に對する危機意識を持つべきなのである。

では、このたとえ話の中のいくつかの特徴的な言葉を取り上げてみたい。

**どうしようか** 金持ちの困惑の言葉。同時にこの男の自問の言葉でもある。このつぶやきは、人間の思惑を描写する、ルカ的表現の一つである。この思い巡らし自体は否定されてはいないし、人間にとって自然のことであろう。**作物 蔵 穀物 食糧** 実は、これらの言葉の前には、日本語に訳していないある言葉が隠されている。そ

れは **わたしの** (ギム) という言葉である。わたしの作物、わたしの蔵、わたしの穀物、わたしの食糧……。ここには、人間のもつ利己主義の醜さが如実に表れている。神が人に与えられた隣人はもとより、これら収獲物を与えられた神ご自身をも視野にいれない人間の愚かな様を描き出している。神にかわって富、物質がこの農夫の崇拜の対象となっているのである。**愚かな者よ** 実際の生活の中で神を無視している人たちのことであり、神を忘れた者たちのことである (ヨブ 2・10、詩篇 14・1)。

**今夜** 前節の農夫の言葉「長年分の」に対応する言葉。神がこの農夫に対して「愚かな者よ」(20)と叱責した真の意味はこの言葉の対比の中にある。食物をたくわえることにおいて、「たましい」のために「長年分の」備えができたとする考え方を、神は叱責されたのである。生命の安全を財産で保障できると思いこんでいるすべての人は、現実を避けて生きているのであり、自分の行動によって自分自身を愚か者と証明しているのである。同時にすべての聴衆に対して、現に起こりつつあることに目をさますようにという、イエスの劇的な警告とも解することができます。

**21** これまでの要約の個所であると同時に22節以降へのつなぎの言葉でもある。「あなたがたの宝のある所には、心もあるからである」(12・34)と、この個所の結末部分にあるように、**神に対して富(む)** とは、わたしたちの心も含めて、一切を神に明け渡し神の所有に帰することである。人の「生命」も「財産」も「持ち物」も、万物の所有権を神に帰するとき、信仰者は「神の前に富む」自由を得る。それは同時に「自分のために宝を積む」生き方、「思いわずらい」(22)から解放され、財の正しい用い方を知り、地上のすべての所有者が神であること、私たちの「生」もが神からの一時的所有であることを悟ることができるのである。

**参考図書** A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」(新教出版社)・A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

## 聖書

ルカ12・13〜21

タイトル  
暗唱聖句

金持ちおじさんの往く末は？  
 たといたくさんの物を持っていても、人  
 のいのちは、持ち物にはよらないのであ  
 る。  
 ルカ12・15

## 目 標

地上の富ではなく、神に喜ばれる生き方  
 を追い求める。

## 導入

(松浦みち子)

皆さんは、遺産相続ということばを聞いたことがありますか。亡くなった親の財産をもらうことです。しかし、このことは兄弟ケンカの種になることが多く、ケンカの悩みをイエス様に相談したとき、話された物語です。

## お金持ちおじさんのひとり言

あるところに大金持ちの百姓のおじさんが住んでいました。その年は、まれに見る大豊作でした。そこでおじさんは考え、心の中で「どうしようか、こんなたくさんのわたしの作物をしまっておく所がないなあ。」と、いろいろ思いめぐらしていました。やがてよいアイデアが浮かびました。「ああ、そうだ。がってんだ!」と手を打ち

こう言いました。「古くなった倉を取り壊せばいいんだ。そして、もっともっと大きな倉を建てよう。そして、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。ふ、ふ、ふ。なーんて、良い考えだ!」おじさんの口から思わず含み笑いが漏れました。「そして、自分の魂にこう言おう。『たましいよ。おまえには長年分の食糧が蓄えてある。なーんも心配することはないぞ。さあ、安心せよ。思うぞんぶん食えよ、飲めよ、楽しめよ』と」。すると、神様がふんぞり返る金持ちおじさんに語りかけられました。「おまえさんはなんとという愚か者だ。おまえの魂は、今夜のうちに取り去られ、死ぬであろう。そうしたら、おまえが用意し、蓄えた物は、だれのものになるのか。」

## お話から学ぶこと

もう一度、イエス様のお話を思い出してみましよう。

イエス様のお話は、質問の形で終わっていますね。それは私たちが、自分でよく考え、イエス様が私たちに教えるようにとされたことを思いおこし、神様のお心を知るためです。でも、知って分かっただけではだめですよ。教えられたことを自分のこととしてあてはめ、実行しなければ、本当に分かったことにはなりません。

このお金持ちのおじさんは、たくさんの財産を持ちながらそれを困っている人に分けようとする心がありましたか？ ありませんでしたね。また、この金持ちのお百姓さんは、神様の祝福と守りがなければ、作物が育ち、実を結ばせることができないことをすっかり、忘れてしまっていますね。雨を降らせ、地を潤し、豊かな実りを与えてくださったのは、神様です。その神様に対する感謝の心が全くありません。そして、自分の寿命は自分の手の中にあるように勘違いして、いつまでも生きていくことができるかと錯覚しています。ただ、自分のことだけを考え、自分のためにだけに貯え、自分だけ楽しもうと思っていたのです。神様に対する感謝のない心は、私たちを自己中心にさせてしまいます。

### さあ、実行しよう！

イエス様のお話には答えもあります。「自分のために宝を積んで神に対して富まない者は、これと同じである。」これが答えです。自分のためにいくら富を蓄えても死ぬ時には何にも持つて行くことはできません。死んだら一卷の終りです。昔、大金持ちの庄屋さんがいました。自分が死んだときに入れられる棺桶に二つの穴をあけさ

せておきました。そして家の者に「わしが、死んだときには用意した棺桶に入れて葬式をだしてほしい。」というのが遺言でした。やがて庄屋さんは死に、棺桶に入れられ二つの手を穴からぶらんとだして墓場に行きました。その葬式の様子を見た人々に、死んだら何にも持つて行くことはできないことを戒めようとしたのです。

イエス様は、「自分のために古びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることはない宝をたくわえなさい。あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。」と教えてくださいました。お金、物、名誉、成功などの地上の富を得ることにあくせくしないで、先ず、御国を求めましょう。神様を信じ、神様のお心を第一として生きていくと、神様は私たちに必要なものは全部備えてくださいます。与えられたものはすべて神様からのものであることを心に留め、神様と人のために喜んで用いる人になりましょう。やがて皆さんは大人になり人生を歩む日が来るでしょう。天に宝を積み神様に喜ばれる生き方をするためにも、今の時、しっかりとイエス様を信じ主と共に歩みましょう。

♪主イエスとともに♪（ふ90、ホ118、イン80）

# 聖書 ルカ14・25〜35 テーマ 建築と戦いの譬 たとえ

序論

(小泉 創)

私たちは大切なことを始めるとき、本やネットで調べたり、人に聞いたりしてよく検討し、見込みがつけば取り組むでしょう。大勢の群衆がイエスのもて来た時に主イエスが語られた言葉は、主の弟子となることかどのようなことにも勝って、よく考えて取り組むべきことであると教えます。

## 一、弟子となるために

イエスのもて来た群衆の中には、興味半分に集まった人もいたでしょうが、真剣にイエスに期待して集まった人々も少なくなかったはず。彼らはイエスの弟子となりたいと思っていたことでしょう。しかし本当の意味で自分たちがどこに向かっているかを知りませんでしたし、弟子となるために自分たちが手放さなければならぬものもよく理解していませんでした。主は弟子となるために、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、自分の命まで

捨てなければ、そして自分の十字架を負ってついて来なければ弟子となることはできないとおっしゃるのです！私は洗礼を受けた時、熱心な信仰をもった先輩たちはキリストの弟子だけれど、自分はまだ弟子ではないと勘違いしていました。実際は、もう弟子の道を歩み始めていたのです。もちろんイエスは、弟子となるために払うべき犠牲があるとおっしゃいます。しかしそれは私たちをおじけづかせるためではなく、イエスの弟子として歩み続けられるようにと、励まし、招いてくださるためです。

## 二、完成を目指して着手する

主はこの考えを伝えるために、ふたつのたとえを用いています。完成の見込みのない建築は着手すべきではないし、勝ち目もないのに犠牲者ばかりを増やす戦争は回避して和解の道をさぐるだろう、と。どちらも勢いや根柢のない精神論でどうにかなる問題ではありません。払うべき代価のこともよく考え、準備する必要があります。自分はキリストの弟子となるために、十分な資質を持ち合わせていると思う人はいるでしょうか。私たちを神



の子とするために、キリストは十字架ですべてを手放して代価としてくださいました。ですから私たちが弟子の道を歩むためにも、「自分の財産をことごとく捨て切る」決断が必要です。それはすべてをキリストに委ねていくという決断です。

### 三、弟子の道を全うするために

人の生活にかかせない塩も、不純物が混じってしまったはその用をなさなくなるように、最初は喜んでイエスについていても、キリストへの情熱を損なうものが混じっていくならば、弟子としての内実を失ってしまいます。次のことが問われています。

#### ①愛情を聖別すること。

私は何を一番慕っているでしょうか。「イエス様が一番」でしょうか。私のために全てを投げうってくださったキリストを一番にしてこそ、本当の意味で大切な人を愛することが出来ます。

#### ②苦難を覚悟すること。

主イエスは十字架の苦しみを負われる救い主です。主についていく弟子たちは周囲から反対を受け、苦しみに

あいました。私たちも主に従い、主をあかしして生きようとするときに、苦しみを受けることでしょう。しかし、むしろそのような苦しみにあうときに、私たちが自分の十字架を負うときであり、主が共にいてくださることを私たちは知るのです。自分の十字架を負うからこそ、主と深く出会うことができます。

キリストよりも身近な人、キリストよりも安楽な道、キリストよりも世の中のような価値観、キリストよりも自分で決めた生き方に流れてゆくとときに、弟子としての生き方から後退してしまいます。

### 結論

キリストはよく考えて、あなたが決めなさいと問いかけています。本当にキリストの弟子となるために、何かを惜しんではないか、本当に価値があるのは何だとあなたは考えるか、とキリストはあなたの心に問いかけます。そして祝福に満ちた弟子の道を歩み続けるようにと励まし招いておられるのです。



## 研究資料

(辻林和己)

ルカ14・1～24は、主イエスが食事に招かれたパリサイ人の家で語られたことが記されている。今回の箇所、25節以下は主イエスの後をついて来た群衆に向って話されたことが記されている。

## テキスト

25 大ぜいの群衆がついてきたので：言われた 主イエスはご自身に従う者（弟子）の覚悟を教えられる。

26 自分の命までも捨てて 「捨てる」は原文では〔ギ〕ミ―セオー。新改訳、新共同訳では「憎む」と訳されている。一つの解釈によると、この言葉の背後にはヘブル語的言い回しが隠されているとのこと。ヘブル語では、比較級がなく、「より少なく愛する」を表すのには反対語を使う。つまり「より少なく愛する」の代わりに「捨てる（憎む）」という言葉を使っている。文字通りの「捨てる（憎む）」の意味ではない。ご自分を誰よりも愛することを主イエスは弟子となる者に求めておられる（マタイ10・37参照）。主イエスを誰よりも愛する者が、家族や隣人や自分自身

を真の意味で愛することができる。

27 自分の十字架を負う ここでの「十字架」は、それぞれが人生の歩みの中で与えられている苦しみや痛み、悩み等のこととも受け取られるが、何よりも主イエスと共に負う「宣教の重荷、苦難」のことであろう（ピリピ1・29、3・10、コロサイ1・24参照）。『自分の十字架を負う』とは、イエスが全生涯を神の御旨にささげたように、神に自分を明け渡すということにほかならない（榊原康夫）。

28 邸宅 原文では〔ギ〕ブルゴス。新改訳、新共同訳では「塔」と訳されている。28～32節で主イエスは二つのたとえ話をしておられる。邸宅を建てるには大きな費用がかかり、労力を払わないと家は建たない。戦争の場合も、よく準備して臨まなければ敵に勝てない。負けると分かっている場合は、戦わずに和する道を探る。まず、すわって 30節でも まず座して と言っておられる。原文ではどちらも同じ言葉が使われている。「まず座して：計算する（考える）」は、事前に計算したり、結果まで予測して、最後には「（邸宅を）完成する」、「（戦いに）勝利する」べき責任を教えておられる。また「まず座し

て計算する（考える）こと」を「まず祈ること」、「時間をかけて真剣に祈ること」だとする「霊的」解釈もある。よく祈り、主イエスのみ言葉を黙想することを通して、主に従う歩みは、たとえ困難があったとしても、恵みと喜びに満ちたものであり、天における報いは大きいことを考えて、覚悟、決断して従ってくださることを主は願っておられる。

**33 自分の財産をことごとく捨て切るものでなくては**  
このとき、エルサレムに、そして十字架に向って進んでおられた主イエスは、従おうとしている者たちこう言われるほどの決意を求められた。私たちにとっては「（神以外の）何物かを生活の中心にするほどそれに執着してはならない」という、持ち物に対する聖別という意味に適応できるであろう。「神第一」として、主に従っていくなら、神は必要な一切を私たちに備えてくださる（マタイ6・33参照）。

**34 塩** 主イエスは「あなたがたは地の塩である」（マタイ5・13）と言われる。塩は物が腐敗するのを防ぐ役目をする。また食物に良い味をつける。キリストの弟子には、塩のように、この世にあっても罪に染まらず、きよ

い生活をして、周りの人たちによい影響を与えていく使命が与えられている。**塩味** 祈りとみ言葉によって主イエスとの交わりを持ち続ける限り、私たちは罪に打ち勝ち、周囲によき影響を及ぼす力を失うことはない。

**35 聞く耳のあるものは聞くがよい** 主イエスが繰り返し言われたみ言葉。主イエスの語られた言葉の真意を尋ね求め、問い続ける心を持つことを主は願っておられる（ルカ8・8参照）。

私たちはキリストの弟子として歩むことに、ときには恐れ、躊躇してしまうことがあるかもしれない。たとえ力なく小さな者であっても、「私は聖霊の力をいただいて主を愛し、従います。主よ、お助けください」と祈りながら、キリストの弟子としての道を歩み続けよう。

**参考図書** 榊原康夫「ルカの福音書」『新聖書注解』（いのちのことば社）、ラルフ・アール「ルカの福音書」『ウェスレアン聖書注解』（インマヌエル綜合伝道団 新教出版社）他

## 聖書

ルカ14・25〜35

## タイトル

キリストの弟子の心得

## 暗唱聖句

自分の十字架を負うてわたしについて来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。

ルカ14・27

## 目標

キリストの弟子としての生き方を明確にする。

## 導入

(松浦みち子)

芸術の秋を迎えました。皆さんは、美術館に絵の鑑賞に行ったことがありますか？ レンブラント、ピカソなど素晴らしい作品に触れる時、画家を通して語りかける神様の声を聞くことがあります。聖書は、字ばかりの書物ですね。マンガのように絵はありません。楽譜も書かれていません。ゲームのように動くこともありません。しかし、よく読んでみるとその中から音が聞こえてくるのです。絵も浮かび上がります。ハラハラドキドキする動きも体験できます。聖書に触れ、心動かされた人が偉大な音楽を生み出し、素晴らしい絵を描き出すのです。聖書ほど、面白く、イキイキとした本はありません。さ

あ、今日もイエス様のお話に耳を傾けましょう。

## イエス様の弟子となるには

イエス様のお話を聞こうとぞろぞろついてきた人々に、「だれでも、父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分の命までも捨てて、わたしのもとに来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。自分の十字架を負うてわたしについて来るものでなければ、わたしの弟子となることはできない。」とおっしゃいました。人々の中には、イエス様に興味をもってついて来る者、イエス様の教えに感動してついて来る者もいました。しかし、イエス様はご自分と運命をとにする者、自分の家族や財産、自分の命などを捨ててまでついて来る者を求められました。

## 三つのたとえ

キリストの弟子になるための献身の心得を示されましたが、三つのたとえをもってキリストの弟子の生き方を考えるよう、お話をされました。

## (第一のたとえ)

だれかが、家を建てようとするときは、仕上げるだけのお金が届りなのかよく考え、計算するでしょう。今の

時代ならローンの利率がいくらで、頭金がいくらあれば家が建つかと計算しますね。もし、計算もしないで建築したら土台を作っただけでお金が足りなくて工事の中止ということになってしまいます。それを見た人々は「なんだ、偉そうなことをいって家を建てかけたが、仕上げができないんだって。バカだなあ。」と嘲笑うでしょう。

キリストの弟子になることは、それと同じで、覚悟が大事で、途中で挫折し、キリストの弟子として歩むことをやめてしまったら、この人と同じように笑われる者になってしまうすよと、語られました。

### (第二のたとえ)

王さまは戦う時、まず座って、作戦を練ります。こちらが一万人の兵隊で、相手が二万人の兵隊だとします。「こりゃあ、歯が立たん。負け戦になってしまふ」と考えたならば、敵が遠くにいる間に使者を送って和をもとめることでしょう。もし、よく考えもしないで、とにかく当たって砕ける！と、命令するならば、多くの兵隊たちは命を落としてしまいます。王さまの場合は、人々に嘲笑われるのと違って、人の命がかかっています。よく熟慮し、戦うか降参するか、二つのどちらかを選ばなければ

なりません。中間はないからです。

キリストの弟子になるには、それと同じで、中間の道はありません。この世にかかわりを持ち続けていくか、一切を捨て切ってキリストのみに従うか、このふたつのどちらかだ、と語られました。

### (第三のたとえ)

イエス様は「塩はよいものです。」とおっしゃいました。塩はどんな味がしますか？「塩辛い」ですね。もし、塩が塩辛くなくなったら、味気ないですね。また、塩は物を腐らせない性質もあるので、その効き目がなくなったらまったく役に立ちません。土にも肥料にも役に立たず外に投げ捨てられてしまいます。

キリストの弟子は、「地の塩」となってこの世であかしする者でなければ、いくら口先だけで「イエス様を信じています」と言っても何の役にも立ちませんね。あなたの日々の行いがほんとうにイエス様に喜ばれ、イエス様の十字架の愛をあかしするものとなるよう祈りましょう。またあなたの言葉が塩で味つけられ、やさしい言葉を使うことができるよう祈りましょう。

♪もちいたまえわが主よ (ホ113)

# 聖書 ルカ15・1〜7 テーマ 迷子の羊

## 序論

(山田和幸)

〈九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を〉捜す羊飼いのたとえは有名です。絵画や黒人霊歌の題材にもなっています。ただ、われわれ日本人には非現実的な話に聞こえたりします。九十九匹はどうなってしまうのだろうと考えるからでしょう。実は、野原には雇われ牧者が番をしているはずであったことが省略されているのです。「死んでしまうかもしれない迷子の羊は、人任せにするわけにはいかない」という良い羊飼いがいるというたとえです。

## 一、罪人を捜し出す主

人々がさげすみ、関わりを持つとしなかった〈取税人や罪人たち〉と、イエスは積極的に関わりを持たれました。〈パリサイ人や律法学者たち〉は、教師であるはずのイエスが、汚れた者たちと関わるのが不満で、つぶやいていました(2)。

「丈夫な人には医者はいらない。いるのは病人である」(マタイ9・12、マルコ2・17)とイエスが語られたのも同じような場面でした。

つぶやいている自称義人の人々に対して、ここでイエスは、たとえを通して自分が何者であるのか、神様は何を求めておられるのかを示されました。三つのたとえで語られた一五章全体に繰り返される鍵の言葉があります。「いなくなった」、「なくした」(4、6、8、9、17「死ぬ」、24、32)、「見つける」(4、5、6、8、9、24、32)、「喜ぶ」、「喜び」(5、6、7、9、10、32)、「悔い改め」(7、10)です。つまり、イエスは失われた罪人を捜し出して、救いに導き入れることを使命としておられたのです。そして、神様は罪人が救われることを最も喜んで下さるのです。

## 二、羊飼いである主

失われた羊と羊飼いが何をたどっているかは、聞いている人々にはすぐにわかったはずですが、旧約聖書では、羊飼いと羊は神と民の比喩ゆづりでした(詩篇23・1)。また、イエスは自分を良い羊飼いにたとえられました(ヨハネ10・11)。

良い羊飼であるイエスは、残りの羊を人任せにしても失われた羊を捜します。羊を愛する故に、自分が手間をかけることを惜しみません。また、迷子の羊がさまようであろう危険な場所を、自らの命の危険も顧みずに捜し歩きます。

そのように、イエスは地上の生涯を全うし、十字架の身代わりを完成されました。

### 三、悔い改めを求める主

たとえのまともに、イエスは〈悔い改め〉という言葉を繰り返されました。羊が羊飼いの元に帰るように、神を離れた罪人が神の元に帰ることが悔い改めです。

罪人が救いに入るためには、この悔い改めがどうしても必要です。後のたとえに出てくる放蕩した弟息子<sup>ほうとうし</sup>は、「本心に立ちかえって」(17)、心からの悔い改めを告白しました(21)。

では、たとえを聞いていたパリサイ人や律法学者たちは悔い改める必要のない人々だったのでしょうか。〈悔い改めを必要としない九十九人の正しい人〉と言われたイエスの言葉は、パリサイ人たちに対する皮肉だけなのでしょうか。後の二人の息子のたとえが、兄息子の反応待

ちのように終わっていることからしても、イエスは自称義人の彼らが「本心に立ちかえ」ることを望んでおられたのではないのでしょうか。イエスはパリサイ人たちにも呼びかけておられたのです。

悔い改める必要のない正しい人間などありません。人は皆生まれながらの罪人です。外側の行いをどんなに整えても、心の中の妬みやつぶやきも罪です(マタイ5:21-48)。悔い改めて神様の赦しと救いをいただくことが必要です。

### 結論

私たちは、ある意味で迷子の羊のようです。神様の元から自分勝手に離れてしまい、命を失う危険にさらされています。

また、私たちはある意味でパリサイ人たちのようです。神様のことを知り神様に愛されたいと願いながら、神様が本当に望んでおられる生き方ができないでいます。

私たちは皆、自分の何が間違っていたかを悔い改めて、神様の元へ立ちかえらなければなりません。神様は何よりもそれを望み、待っていてくださいます。

## 研究資料

(宮澤清志)

この個所は、ルカによる福音書の中でも重要な譬<sup>たとえ</sup>が並べられている個所といえる。特に本章では3つの譬が並べられており、そのどれもが「なくしたものを見つけた喜び」というテーマにおいて語られている。ルカではこのように一対の短いたとえ話を語り、その後、クライマックス的なたとえ話を語るといふ手法が取られることがしばしばある。それゆえ今回の聖書個所を語る際には、これに続く2つのたとえ(15・32)まで目を通しておく必要がある。

さて、この「失われた羊」のたとえはマタイ18・12～14にも登場している。ハンターは、この失われた羊のたとえは、マタイとルカとではその聴衆を変えていると指摘する。ルカでは(おそらくこちらの方が原型に近い)、パリサイ人たちに語られた神の救いの喜びのたとえであったのに対して、マタイではあやまちを犯す教会員に対する配慮を求める弟子たちへの勧めのたとえとして語られているのである。

## テキスト

1・2 15章全体にかかる、このたとえ話の導入。ルカにおいてはよくあることではあるが、この導入によって、本題であるたとえをどのように理解すべきかを示しているのである。**近寄ってきた** 取税人や罪人たちを主語とした言葉。しかし、主はその取税人や罪人たちを「受け入れている」(RSV)のであり、「歓迎している」(NEB)のである。むしろ主のこの行動に注目したい。次節には **迎えて** という言葉が登場するが、イエスの側からすれば、取税人や罪人がイエスのもとに来ることを歓迎したのである。喜んで迎え入れたのである。しかも、**一緒に食事をしている** この光景は、5・29～32にも登場しているのだ、そこをも参照していただきたい。一方、その光景を見て、パリサイ人や律法学者たちは **つぶやく**(ギ)ディアゴンギュゾ)。この言葉は、通常の「つぶやく」よりも強調されて用いられている。この語は他にはルカ19・7にのみ用いられている言葉である。**取税人** 当時は割当額以上を取る盗人として憎まれていた。**罪人** 道徳的な法を破った人というだけにとどまらず、パリサイ人や律法学者たちが実践した儀式的洗浄規定を



守らない、守れない人々をも含んだ言葉であろう。あるいは律法を知らない人々に対してもこの言葉が用いられた。

**4～6** 羊の譬は旧約聖書においてはしばしば登場するが、そこでは選民であるイスラエルの民が羊にたとえられている（エゼキエル34・11～12、イザヤ40・11、他）。そして、これらの個所では、羊飼いである神が失われた羊を探し出し、取り戻す存在として描かれている。更に、新約聖書ではイエスご自身が「わたしはよい羊飼である」（ヨハネ10・11）と語られる。同時にこの羊飼は、一匹の羊の名をも覚えていいるのである。

**4 野原**（ギ）エレモス この言葉は、他の聖書の訳では「荒野」（マタイ3・1、マルコ1・3）という意味で用いられている。**九十九匹** 残された九十九匹の羊はどうなったのか、という問いは、ここでは愚問である。それよりもこれから九十九匹を野原に残しても失われた一匹を探しに行くという羊飼いの愛を語りたい。羊飼いにしても、いなくなった一匹を探しに出かけるということは、自らの命をかけた行為である。捜し歩かないであろうか ここには「当然捜し歩くはずである」という

含みをもって語られている。

**5** マタイの並行記事にはない言葉。さまよい歩いて疲れ果て、長い道のりを歩いて帰れなくなっていたのであろう。

**6 一緒に喜んでください** 見つけた本人だけが喜ぶのではなく、罪人たちやパリサイ人、取税人たちへの招きも含まれる。それほど喜びの大きさを示している。そして、ただの喜びではなく、祝宴を伴った喜びであり、失われた者が悔い改めて神に立ち返るなら、天上では御使いの大祝宴が催されているのである（7、24）。

**7** この節は、この譬の意味についてイエスご自身が聴衆に与えた解説である（10節も同様。なお、19・10も同時に思い巡らしていただきたい）。**悔い改め**（ギ）メタノエオー（善に向けてであれ悪に向けてであれ）心を変更することを指す言葉である。**悔改めを必要としない九十九人の正しい人** 外側は律法に忠実でいる大半の人々のことである（ゴデー）。具体的には、自らを正しいとし、自称義人をきめこむパリサイ人たちに対する皮肉の込められた言葉であろう。

**参考図書** 10月14日分と同じ。

## 聖書

ルカ15・1〜7

タイトル  
暗唱聖句

迷子になっていませんか？  
いなくなった一匹を見つけるまでは捜し  
歩かないであろうか。      ルカ15・4

## 目 標

神から離れた人間を追い求められる神の  
愛を知り、神のもとに帰る。

## 導入

(飯田勝彦)

皆さんは、迷子になったことがありますか。その時、どんな気持ちでしたか。迷子になって楽しい人はいないでしょう。淋しくて、不安で泣きそうになりませんでしたか。でも、お父さんやお母さんが捜してくれて会うことができた時には、安心して、嬉しかったでしょう。

イエス様は、お父さんやお母さん以上に、皆さんを真剣に捜しておられます。

## イエス様は私たちの羊飼ひ

イエス様の所に、罪人と言われてい取税人たちが話しを聞くために近寄って来ました。でも、それを見ていたパリサイ人や律法学者達は「イエスは、罪人たちと一緒に食事をしている。何ということだ」と不平を言い出し

たのです。それを聞いたイエス様は不平を言っている人たちに、羊飼ひのお話しをされました。「大切な羊を100匹持っていてその内の1匹が迷子になったら見つけ出すまで捜すでしょう。そして、見つかったなら近所の人達を呼んで一緒に喜ぶでしょう。そのように悔い改めて罪から自由にされた人がいたなら、天では大きな喜びがあります」と言われたのです。ここでイエス様の言われた迷子になった羊とは、私たちのことです。羊は迷いやすく弱い動物で一匹では生きて行けません。私たち人間も同じです。そして、この羊飼ひは神であるイエス様です。私たちが、イエス様を知らないか信じていないなら、私たちは迷子になっています。皆さんは、どうですか。もしも羊が羊飼ひに捜し出されないでいたら死んでしまいます。イエス様を信じている人にはイエス様が私たちの羊飼ひとなつてくださいます。そして、いろいろな危険から守り、私たちを幸せな生活へ進ませて下さるのです。イエス様はあなたの羊飼ひとなっていますか？

## イエス様は私たちを愛される

皆さんは、大切な物を必死で捜したことがあるでしょう。この羊飼ひは、「見つかったも見つからなくてもい

いや、あと99匹もいるんだから」と思ったでしょうか。そうではありません。羊飼いは99匹の羊を後にして、迷子になった1匹のために捜しまわったのです。それも簡単にあきらめたりはしません。見つけ出すまで必死に捜したのです。そのようにイエス様は、迷子になっている私たちを捜されるのです。それは、イエス様が心の底から私たちを愛しておられるからです。愛の大きさはその人に使う時間と力によって知ることができます。

イエス様は、皆さんがイエス様のもとに帰ってくるまで捜し続けられます。あなたはこんなにもイエス様に愛されていることを知っていますか？

### イエス様は私たちを喜ばれる

羊飼いは迷子の羊を捜し出して、その羊をがっしりと抱えて肩に乗せました。迷子の羊に「怖かっただろう。大丈夫だからな。もう決してお前を放さないぞ」と言う思いがあつたのでしょうか。

羊飼いは、羊が見つかった喜びを友人や近所の人たちと共に分かち合つたのです。羊飼いがどんなに羊を愛していたか、また見つかったことを喜んだかが分かります。皆さんも、無くした大切な物が見つかった時には嬉し

かつたことでしょうか。イエス様も私たちを捜し見つけ出した時には大いに喜ばれるのです。イエス様にとって私たちは、失いたくない喜びの存在なのです。

### まとめ

今、皆さんはイエス様から離れて迷子になっていませんか。「イエス様なんて信じない。僕には関係ない」と思っている人は、迷子になっている証拠です。もしそうだとするならば、決して幸せに歩むことは出来ません。またそんな人をイエス様はどんなに悲しんでおられるでしょうか。イエス様は皆さんを今も、見つけ出すまで捜しておられます。羊は羊飼いのもとにいるからこそ、安全に生活できます。私たちもイエス様のもとにいてこそ安心して暮らすこと出来るのです。

私たちを愛し喜んでくださるイエス様のもとに帰りましょう。

♪子どもの友は♪（ホ7、ふ45）

# 聖書 ルカ15・11～24 テーマ 放蕩息子

## 序論

(福井文彦)

有名な「放蕩息子のたとえ」として知られている個所です。たとえの中心は放蕩息子のように思われますが、真の主役は父です。《死んでいた》のも同然の息子を迎え入れる父の姿を通して、この物語ほど天の父なる神の愛を豊かに表しているたとはありません。この話を通して、私たちの本当の幸せは神にあることを教えられます。

## 一、父を離れて

弟息子は、父の存命中に遺産相続を要求し、与えられた財産全部を早速お金に換えて、父を離れ遠い所へ旅立ちました。ところが、そこで放蕩の誘惑にとらえられ、全財産を使い果たしたのです。

弟息子がすべてを使い果たした時、その地方にひどいききんがやってきました。彼はたちまち困窮して、ある人の所に世話になろうとしました。しかし、世間は甘くないもので、その人は彼に豚を飼わせたのです。イスラ

エルでは豚は汚れた動物ですから、豚飼いは奴隷の仕事でした。彼は屈辱的な仕事についたのですが、それでも食べることに窮してしまつたのです。彼は豚の食べるいなごまめを食べたいと思うほどでしたが「それをくれる人はいなかった」(16節直訳)のです。

何が問題だつたのでしょうか。誘惑に満ちた悪い環境、あてにならない表面的な人間関係、予期せぬ自然災害でしょうか。しかし一番の問題は彼が自由を求めて父から離れたことでした。この弟は父の心を知らず、父の気持ちに完全に無視しました。彼の関心は父のことより財産であり、人よりもまず自分のことであり、父との関係を煩わしく思い、父を離れたのでした。

## 二、父のもとへ

弟息子は食べ物にも窮し、豚飼いの仕事をしてやっと餓死を免れていました。しかし、空腹で汗と埃にまみれ、豚と一緒に暮らす惨めなどん底の生活でした。そんなある日、つくづくと我が身をかえりみ、彼は「本心に立ちかえつて」、今まで気づかなかつた自己を見出したのです。このような状況に至つたのは環境や自然災害や人の関係ではなく、自由を求めて父のもとを離れた自分

勝手な生き方にあつたことに気づいたのです。

彼はふと思い起こしました。「父のところには食物の  
あり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで  
飢えて死のとしている」と。とにかく家に帰つて「父よ、  
わたしは天に対しても、あなたにむかつて、罪を犯し  
ました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。  
どうぞ、雇人のひとり同様にしてください」とお  
願ひしよう。

彼は自分の人生の悲惨さを認め、その原因である自分  
の罪を告白して（悔い改めて）父に帰ろうと決心したの  
です。本来ならば到底赦されないのであるが、父の情  
けによつて雇人の一人にでもしてもらおうと決心するの  
です（黙示録2・5）。

### 三、迎える父（神）

このたとえ話のクライマックスは、放蕩息子を迎える  
父の愛です。弟息子は、そこで立つて、父のところへ出  
かけたのです。彼にして見れば、父から離れて遠い所  
へ行った時のことを思えば、どの面下げて帰ればよいの  
か、とても父に合わせる顔もなかったでしょう。

しかし、父は日々、首を長くして、息子の帰りを待つ

ていたのです。父は変わり果てた姿の息子を遠くから認  
め、走り寄り、首を抱いて接吻しました。それだけでは  
ありません。息子のざんげのことは最後まで言わせ  
ず、最上の着物を着せ（新しい品性）、指輪をはめ（子と  
してのしるし）、くつをはかせました（新しい歩み）。

さらに、（肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食  
べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに  
生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから）  
と、盛大な祝宴が開かれました。

こうして、父から離れ豚と一緒に暮らす惨めなどん底  
の生活をしていた放蕩息子は、父の愛で満ち足りたので  
す。

### 結論

神から離れた人生は放蕩息子のように幻滅に終わります。  
しかし、神のもとには真の幸があります。その神  
のもとに帰るために、すでに父の側で一切の備えが出来  
ています。それがイエス・キリストの十字架です（ヨハ  
ネ19・30）。ただ、私たちが悔い改めて、父の元に帰るな  
ら無限の愛をもって迎え入れてくださり、だれでも満ち  
足りた本当の幸いな人生を送らせてくださるのです。

## 研究資料

(小平徳行)

15章全体は、3つのたとえ話から成っている。全体としてのテーマは「失われたものを取り戻す喜び」である。その中で、ここは罪人を赦す神の愛のたとえ話と言うこともできる。イエスはここで福音の全体を語ったのではなく、福音の主動力となる神の赦しの愛について語っている。また、先の2つの話では、捜す神が、ここでは、帰って来るのを待っている神が描かれていることから、人間が神のもとに帰ることの必要を教えている。

## テキスト

12 わたしがいただく分 遺産の分配は長子が他の兄弟の二倍となる。したがってこの場合、弟息子は父の遺産の三分の一(申命記21・17)である。遺産の分配を父の存命中に求めることは当時法外なことで、「父よ、わたしはあなたがすでに死んでいればよかった」と言うことに等しかった。父の生存中に分けた場合、長子の分は父の死まで父の手中にあり続ける。

13 全部とりまとめて 新共同訳では「全部を金に換えて」。彼が何も残さないで出て行ったということは、や

がて帰ってくるという可能性は一切考えていないということであり、また父親を顧みる気持ちも一切ないということである。遠い所 そこでは豚が飼われていることから、異邦人の世界へ行ったということである。放蕩(ギアソートース) 語源的には「救いのない、維持することができない」という意味を持っている。

15 豚を飼わせた 律法によれば豚は汚れた動物とされていた(レビ11・7)。従ってユダヤ人は普通の状況では豚を扱うことは決してなかった。この時、弟息子は豚の世話を考えなければならぬほど、絶望的な困窮にあったのである。

16 いなご豆 大きなさやがなり、中に小粒の種子が入っている。これを枝につけたまま乾燥すると、甘みのある飼料になる(「エッセンシャル聖書辞典」)。何もくれる人はなかった 人々の弟息子に対する扱いは豚以下であった。

17 本心に立ちかえって 困難は人を現実に向き合わせる手段となる。彼は父のもとでは雇い人さえも食物があり余っていたことを思い起こし、父のもとにあることはかり知れない豊かさで自分のみじめさに気づいたので



ある。

18 天に對しても 「天」とは神に對する敬虔な思いから来る遠回しな表現。弟息子はまず神に對して罪を犯したことを認めている。罪はいつでも、人に對する以上に神に對するものである。もうあなたの息子と呼ばれる資格はありません 父親に對する非礼のゆえに、息子として扱われるべき者ではないと考え、最低、生活できるだけの賃金を得るために、雇人のひとりにしてもらおうとした。

20 父のところへ ここで「彼の故郷へ」とか「彼の家へ」ではなく「父のところへ」と言っているのは、父との関係の回復に焦点が当てられているからである。まだ遠く離れていたのに 父親は息子の帰還を期待し、目を凝らして待っていたのであろう。哀れに思つて（ギ）スプランクニゾマイ） 10月7日分参照。父は死にかけている自分の息子を心の底から哀れんだ。走り寄り 父親が走り寄るといふのは、古代オリエントの民族からすれば驚くべきことであつた。接吻した 厳密には「何度も接吻した」とか「愛情込めて接吻した」と訳すことができる言葉で、父親がうわべだけでなく心から息子を受け入

れたことを示している。

22 最上の着物 社会的地位を表す。指輪 印章にも用いられ、權威を表す。はきもの 自由の象徴。奴隷は普通、はきものをはかなかった。これらのものは、歸つて来た息子を雇い人としてではなく、真に息子として迎へ入れていることを表わしている。

23 肥えた子牛 特別なもてなし用に飼育されたもので、ここで用いたということは、これ以上にふさわしい機会は決してないと判断したからである。これは町民全体にふるまうに十分な量であつたゆえ、この祝宴は大規模なものであつただろう。上流階級の家族はしばしば、息子の成人、結婚に際し、町民全体を祝宴に招待した。

24 死んでいたのに生き返り、いなくなつていたのに見つかったのだから ここに父親のあふれるばかりの喜びが表現されている。いなくなつていた「滅びる、失う、行方不明になる」の意味。命の源である神から背き離れた人間は、肉体の命があつても、靈的には死んでいるのである（エペソ2・5）。祝宴 イエスが神の国の象徴として好んで用いている（13・29、14・15・24）。

参考図書 10月7日分と同じ。



## 聖書

ルカ15・11～24

## タイトル

さあ帰ろう、神様のもとに

## 暗唱聖句

このむすこが死んでいたのでに生き返り、  
いなくなっていたのに見つかったのだから。

ルカ15・24

## 目標

神のもとに真の幸いがあることを知り、  
神に立ち返る者となる。

## 導入

(飯田勝彦)

みなさんはこれまで、教会学校で神様のことについて何度も聞いてきたでしょう。そこで質問です。もし、お友だちから「神様ってどんな方？」って聞かれたら、どう答えますか？ イエス様は、よく譬え<sup>たと</sup>を用いて神様のことを教えられました。

## ありのままの自分に気づく

今朝の箇所は、父親から離れた放蕩息子<sup>ほうたうしこ</sup>の話です。この放蕩息子は、最後には父親のもとに帰ってきてきて本当の幸せを取り戻しました。これは、神様から離れてしまった私たちの姿と、私たちを愛される神様の姿を表しています。

放蕩息子が父親のもとに帰るきっかけとなったのは、

彼が「本心に立ちかえって」(17)とあります。本心に立ちかえったとき、彼は自分のありのままの姿に気付きました。それは自分が罪を犯していて、息子と呼ばれる資格がないことでした。息子は、父親から財産を一方的にせがんで出て行きました。父親は悲しかったでしょう。そんな思いも無視し、彼は自己中心な道を歩んだのです。自己中心とは、相手の思いを理解しようとせず自分の考え、自分のやり方を押し通そうとすることです。彼はそんな自分であることに今まで気付いていなかったのです。そのような彼の人生はすべてが上手いはず、心がすさんでいました。

私たちは、神様を無視して自分勝手に生きている者です。それは自分を見失っている人生と言いかえることができます。

みなさんは、ありのままの自分の姿に気付いていますか？ 放蕩息子が本心にかえり、自分の姿に気付くことができたのは、父親の所にいた時のことを思い出したときでした。私たちは、私たちを愛される天の父なる神様を知って、自分を知ることができます。

## ありのままを受け入れられる

罪人である自分の情けなさに気付いた息子は、どんな姿であれ父親のもとに帰ることを決意します。これが悔い改めです。悔い改めるとは、犯した罪を後悔して終わりではありません。神様に背を向けていた人生から神に立ち返ることです。

放蕩息子には、ありのままの自分の姿でトボトボと家に向かいました。すると、彼を見つけた父親が走り寄って来て彼をグツと抱きしめ接吻したのです。父親は息子が出ていった時から毎日、息子の帰りを信じて「今か、今か」と待っていました。その思いはどれほどだったでしょう。か。息子からしたら、父親から抱きしめられるような者ではありません。でも父親は、息子を責めることなく彼のために服、指輪を与えたうえパーティーを開いたのです。このとき息子はありのままの自分を赦し受け入れてくれる父親の愛を知りました。

父なる神様は、ありのままのあなたを赦し受け入れるために、もうすでにその道を開いて下さっています。その道こそが、イエス・キリストです。救い主イエス様は、あなたが神のもとに帰れるように、すでに十字架で命を

投げ出して下さっておられます。このキリストを信じるなら救われるのです。

神様は、あなたがキリストを信じ父なる神様のもとに立ち返るのを待っておられます。これが神様の愛です。

ありのままを受け入れてもらった息子は、どんなに嬉しかったでしょうか。この後の彼のことは記されておりません。しかし、彼は父親のもとで幸せを回復し父親に忠実に仕えたに違いありません。

私たちは、罪深いありのままの自分に気づき、神様に受け入れられたとき、神様の大きな愛の中で生きることができるようです。

神様の愛を体験したら、喜びと自由が与えられます。そして、素直に自分の弱さをオープンにすることができるようになります。それだけではなく、お友達の弱さを赦して受け入れられるようになります。

## まとめ

放蕩息子は私たちで、父親は神様です。神様から離れては本当の幸せはありません。喜んで迎え愛してください。神様のもとに、さあ帰りましょう。

♪主はすばらしい♪(ホ135、イン11、PW29)

# 聖書 ルカ18・1～8 テーマ 不義な裁判官

序論

(石田高保)

今日の個所のテーマはルカ自身が記しているのではありません。それは〈失望せずに常に祈るべきこと〉です。

## 一、失望しやすい現実

〈ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいた〉、弱い立場の人にとつては公正な裁判官こそが頼みの綱です。当時のやもめは自分を扶養してくれる子どもや親族がいらないなら、寄る辺ない最低の生活を強いられることになりました。ところがこの裁判官は彼女の訴えを何度も門前払いにしていました。しかし心の中は穏やかではありません。〈絶えずやってきてわたしを悩ます〉と、彼女を厄介に思っていたことがわかります。このたとえ話を聞いていた人たちは義憤に駆られたことでしょう。「なんとひどい裁判官だ。ゆるせない」と。しかし話の展開は、不義な裁判官が上位の権力から処罰されるという勧善懲悪ではありません。人を人と思わぬ裁判官ですが、煩わしさから逃れるために、〈彼女のために

なる裁判官をしてやろう〉と重い腰を上げます。これほどひどい裁判官でも、しつこく訴え続けるやもめの言い分を聞いてやろうとするなら、なおさら私たちの天の父は私たちの祈りに応えてくださらないはずがない、という結論です。聞いていた人たちは神の慈愛と祈りに働く神の力が目が開かれたことでしよう。

このような神の約束の一方で私たちの責任も明らかにされます。〈イエスは失望せずに常に祈るべきことを：教えられた〉ということは、祈りが応えられないために失望しやすいことを背景にしています。一度ならず祈るけれども、途中で失望して祈るのをやめてしまうという現実を受け止めての言葉でしょう。それでは祈り続けるためにはどうしたらよいのでしょうか。イエス様は神のご人格に目を向けさせます。当然、不義な裁判官の対極におられる方で、〈日夜呼び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれること〉の決してない方です。

## 二、失望を克服する祈り

けれども私たちの中に、イエス様の言われるままの神様イメージを受け取っていない人がいるかもしれませ

ん。不義な裁判官ほどではないにしても、神はそれほど気前の良い方とは思えなかったり、自分の必要には無関心でいると思ひ込んでいたり、良い行いと交換で祈りに応えようと考へていたり、祈りが足りないから、不信仰だから祈りには応えないと思つてはいないでしょうか。おおよそ神様のイメージは、自分の親とダブリやすいものといわれます。人間の親は不完全で神のイメージを体现するには十分ではありません。ですから神様の途方もない気前の良さが受け取りにくいのも無理はないでしょう。もしそうであるならば、まずその間違つたイメージを手放しましょう。神は〈選民〉、つまり神を愛する私たちの祈りには無条件で応えたいと願つておられます。祈りが応えられるのはひとえに神の恵みであつて、私たちの出来不出来によるものではありません。ただ、このやめめのように願ひ続け、祈り続けねばよいのです。〈神はすみやかにさばいてくださる〉、神は私たちの祈りに応えようと手ぐすねを引いて待つて下さいます。決して不義な裁判官のように訴えをたなざらしにはなさいません。もちろん、神の知恵深い時があり、待たされることもしばしばですが、神が私たちの祈りに敏感であり、

深い関心を持つておられることに変わりはなく、基本的にはすぐに応えようとしておられるのです。

不義な裁判官がいやいやながら訴えを取り上げたのは違つて、神はどこまでも公正なお方で、長い時間がかつても私たちの真実を関係者の間に明らかにしてください。ですから私たちには「正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた」イエス様の生き方が開かれています（Ⅰペテロ2・23）。

なおイエス様は（人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか）とおっしゃつて、私たちに釘を刺すこともお忘れになりません。この信仰とは、神への幼な子のような信頼に他ならないでしょう。再臨のときまで、私たちが失望して祈ることをやめてしまわない姿を主は見たいと願つておられます。

### 結論

神様は愛情ぶかく、知恵ぶかい私たちのお父さんです。決して出し惜しみや意地悪をなさる方ではありません。ここで私たちに求められているのは、すぐにでも応えようとしておられる神に信頼し、諦めないで祈り続けることではないでしょうか。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

1 この節は、いつでも祈るべきことの奨励であり、この譬え話の緒論ともなっている。この節の奨励のように、たえず祈るべきこと（1テサロニケ5・17参照）は、ユダヤ教の教えと対立している。ユダヤ教では、1日3回祈ることが奨励されており、度々の祈りは禁止されている。

2 裁判官 この裁判官は、「不義な裁判官」（6）と言われている。裁判官は、旧約ではしばしば、具体的に、特に貧しい人々や孤児、やもめに対して暴虐をふるう者として描かれている（イザヤ10・1～2）。なお、ユダヤ教の法廷裁判は複数制であり、この裁判官は、文脈によれば自分一人で開廷も判決も下せることから、異邦人の裁判官、すなわちヘロデカローマの支配下にある裁判官であろうと推測される。

3 やもめ やもめは旧約においては人からの助けのない、暴虐と搾取にさらされやすい弱者の典型例としてあげられている。そうであるから神から特にその訴えを

聞いて頂けると約束されてもいるのである（出エジプト22・21～22、申命記27・19、エレミヤ7・1～15他）。このやもめの願いは、**わたしを訴える者** から守ってくださるよう、ということであった。具体的な内容はわからないが、この当時のやもめは、たとえば夫からの遺産であった土地や家を金持ちに奪われたり、あるいは亡夫の借財のために子どもが売り飛ばされたりということが起こっていたようである。

4～5 たびたびきて、願ひ続けた（3）やもめに対して、裁判官は、**しばらくの間** 聞き入れないでいた。**心のうちで考えた** 新共同訳では「ひとりごとを言った」と訳している。ルカによる福音書で登場する人物は、しばしば「心の中で」話したり考えたりしている（ルカ15・17、16・3）。

この言葉に続いて、この裁判官は心の中で話し始める。4bは2節の繰り返しであり、この裁判官のもっている性質を再現する。**面倒をかける** 原語では、非常に強い言葉で「目の下を打つ。黒目を与える」という意味である。私に打撃を与えて目の下を黒くする、という意味であろう。**彼女のためになる裁判** 直訳は「彼女を正當に

扱うことにしよう」となる。**絶えずやってきてわたしを悩ます** とは、終わるまでやってきて、わたしの目の下を黒くする、となる。**絶えず** とは、ひっきりなしにという意味の他に、終わりでまでという意味も含んでおり、この言葉は後半の終末の裁きの備えともなっている。

**6 そこで主は言われた** この節から、前節までの譬え話の適用を語られる。**不義な** 買収しうる裁判官、あるいはこの世的、といった程度の意。

**7 まして神は** 前節までは、裁判官とやもめという図式であった。しかしこの節では、その対比が神と選民という図式へと変わっている。もしも不義な裁判官が、しつこい嘆願に降参するのであれば、まして愛の神は、その選民の祈りを聞いて、お裁きにならないはずがない、ということである。**選民** 旧約時代では、選民とは、主なる神との契約の關係に生きていたイスラエルの民とされていた。しかし新約の時代にあつて、選民とは、キリストを信じて生きる教会であるとされる。**長い間そのま**まにしておかれることがあろうか 直訳すると「彼らについて寛大であることがあろうか」となり、この「彼ら」の理解によって様々に訳が分かれる。たとえば彼ら＝選

民とすれば、「裁きを行わずに選民を長く待たせるであらうか」、また、彼ら＝選民の叫びとれば、「選民の叫びの声を気長に聞いておられるであらうか」、また彼ら＝迫害者にとれば、「裁きを行わずに迫害者に対して寛容にしておられるであらうか」となる。幸い、いずれの場合も、結局意味するところに大差はない。

**8 あなたがたに言うておくが** 「われ汝らに告ぐ」(文語訳)。ここで語調が非常に厳しいものになる。**神はすみやかにさばいてくださる** 選民の叫びを、迫害者によつて起こされた苦悩の叫びとして、神は裁いてくださるということ。**信仰** この信仰には定冠詞がついており、具体的には人の子の到来まで絶えず祈り続ける信仰を指すのであろう。せつかく、迫害の中の選民のために人の子が来られても、その時、地上に信仰がなかったとしたら、という警告の意味も込めた言葉であらう。

**参考図書** A・M・ハンター「イエスの譬えの意味」(新教出版社) 他



## 聖書

ルカ18・1〜8

## タイトル

不義な裁判官

## 暗唱聖句

イエスは失望せずに常に祈るべきことを、人々に譬で教えられた。

ルカ18・1

## 目標

失望しないで祈り続ける者となる。

## 導入

(水野晶子)

こんな話を聞いたことがあります。天国の倉庫に、リボンが付いたたくさんプレゼントが置いてあります。クリスマスサンタの倉庫ではありません。実は、このプレゼントは届け先がわからなくなったものなのです。神様は、お祈りをお願いされたことを一番良い時に届けたいと準備したのに、途中でお祈りをやめてしまったために、送ることができなくなってしまったのです。もったいないですね。

皆さんの中にも、一回か二回お祈りしてあきらめてしまった人はいませんか？ お祈りしても聞かれないと勝手に思い込んで祈るのをやめてしまっていないですか？

イエス様は失望しないで祈り続けることを、こんなた

とえ話で、教えられました。

## 悪い裁判官でも

ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいました。いばつていて、人を助けようなんて思っていないその裁判官のところに、ご主人をなくして誰にもたよることのできない女の人がやってきました。困った問題が起きて訴えられたので、裁判をしてほしいとお願いするためです。この裁判官は、金儲けにならないし、関わるのは面倒だと思い、すぐ追いつ返しました。ところが毎日、毎日やってきては裁判をしてほしいと訴えるのです。断つても追いつ返しても来るのです。うるさくてしかたありません。あまりのしつこさに我慢できなくなって、「もうたくさんだ、しかたがない。裁判をしてやろう。そうすれば煩わされることもなくなるだろう」と、裁判をする事にしました。

## 祈りに答えてくださる神様

イエス様は「こんなひどい裁判官でも訴えを聞いたのだから、まして正しい神様が毎日、夜も昼も祈る人々を放っておかれることはあるでしょうか。そんなことは決してありません。神様は祈りを聞いて答えてくださる方です」と失望しないで熱心に祈ることを教えました。



みなさんは、祈りに答えてくださる神様を知っていますか？「本当に神様は聞いてくださっているのかな？」と疑ったり、「こんなこと祈ってもきつと無理だよ」と信じられなかったり、初めのうちは祈ってもだんだん祈りが簡単になって、そのうちにやめてしまうことはありませんか？ 毎日、同じことを同じ言葉で祈ってしまつて、神様とお話するのでなく、習慣で祈っていませんか。

♪君は神さまにネ、話したことあるかい？ 心にあるまを うち明けて、天の神さまはネ 君のこと何でもわかつておられるんだ 何でもね だから空あおいで「神さま」と一言 祈ってごらんよ わかるから 小川のほとりでも 人ごみの中でも 広い世界の どこにいても 本当の神さまは いまも生きておられ お祈りに答えてくださる♪（新聖歌41）と賛美にあるように、神様にいつでもどこでも、どんなことでも祈りましょう。神様はお祈りに答えてくださいます。あきらめないで失望しないで祈り続けましょう。

### 失望しないで祈り続けた人

イギリスの国に、ジョージ・ミューラーという先生がいました。両親のいない子どもたち三千人を養い育てて

いました。先生はいつも神様にお祈りして、祈りの日記をつけて、神様がどれだけ祈りに答えてくださったか記録してきました。ある時、子どもたちのお昼に食べるものが何もありません。コック長はミューラー先生にそのことを知らせました。すると、ミューラー先生は「神様にお願ひしましょう。いつものようにお皿を並べておきなさい」といわれて、一生懸命祈られました。15分前になつても5分前になつても何も起きません。子どもたちはお腹を空かせて待っています。その時です。馬車の音が聞こえ、たくさんのお食料が届けられました。神様が、誰かの心にミューラー先生のところに食料を届けるように語りかけられたのでしょうか。このように、すぐ答えられた祈りもあります。何十年も祈り続け、ミューラー先生が亡くなつてから何十年もたつて、祈りが答えられたこともありました。

私たちも神様を信じて、疑わず、あきらめず、失望しないで祈り続けていくとき、神様の方法で、必ず答えられることを信じて、忍耐を持って祈り続けましょう。

♪いのつてごらんよわかるから♪

（新聖歌41、PW7、イン70他）

# 聖書 ルカ18・9～14 テーマ パリサイ人と取税人

序論

(石田高保)

神から義とされているかどうかの対比が、このたとえ話ほど鮮やかにされているものはないでしょう。神の私たちを見る目は、私たちが自分や他の人を見る目とはずいぶん違うことを思い知らされます。神の見る目、つまり聖書的な価値観をつちかうことが私たちの生き方と生活に変化をもたらします。

## 一、律法主義のわな

イエス様はこのたとえ話をだれに向かってしておられるのかという、それは「自分を義人だと自任して他人を見下している人たち」です。彼らはパリサイ人にたとえられています。いっぽうの取税人は、道徳的にも社会的にもパリサイ人の対極にいた人です。パリサイ人は「わたしは：貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、この取税人のような人間でもないことを感謝します」と神に語りかけているところを見ると、近くで祈っている取税人を明らかに見下していることがわかります。自分の立ち位置は神と

の関係ではなく、取税人に優越する関係に依存していたということになります。つまり彼の目にはほんとうのところ神は入っておらず、ただ自分と他の人との関係に関心があつたのです。神との関係によって立つのでなければ、人はおのずから他の人との相対的な関係に依存するようになります。別な言い方をすれば神様から無条件で受け入れられていることがわからなければ、人と比べることによって自分の相対的な価値を見いだすほかはありません。それは必然的に人を羨むか、見下げるかのどちらかしかないことになります。舟からおかに上がらない限り、揺れが収まらないのと同じです。

このように神を計算に入れない相対的な価値観は、自分の優位性を誇示せずにはアイデンティティーを保てないので、パリサイ人は自分の良い行いを神の前に誇ります。自分の宗教行為と引き換えに祝福してください、いや祝福して下さらなければなりませんという思いでしょう。つまりギブ・アンド・テイクの関係を無意識のうちに神に要求しているわけです。しかし残念ながら神は取引をなさらない方です。神が与える場合、何かの見返りや取引ではなく、恵みによるからです。

## 二、律法主義からの解放

行いによって神から義とされようという生き方は、決して神の意図されたことではなく、アダムがエデンの園で神に背いた時に発生したものと言ってよいでしょう。神の前に出るためにいちじくの葉で裸を隠そうとしたのは、まさに自分の行いによって神に義とされようとしたことの現れです。彼は神に依存しなくても、自分の力で人生を切り開けると考えました。その結果、神により頼むのではなく、自分の行いにより頼もうとする間違った価値観が全人類にしみつくことになりました。その典型的な人物が、このパリサイ人です。彼はあまりに自分に依存しているため、神により頼むことがわからないほどになっています。もつと言えば彼はほんとうのところ神を必要としてはいません。これこそ律法主義の正体であり、人間を神から遠ざけるものです。今日それは完全主義、成果主義、結果主義と言い直すことができるでしょう。これは人間の本性に深くからみついていて、気づくことも、取り除くことも人間の努力ではなしえず、ただみ言葉と聖霊によるほかはありません。いっぽう、取税人と言えばパリサイ人とは正反対で、自分の罪深さに打ちのめされています。彼は心底、神を必要

としているのです。(神様、罪人のわたしをおゆるしください)という祈りほど、神から受け入れられるものはないでしょう。なぜなら自分のほんとうの姿をさらけ出して神の憐みに寄りすがっているからです。取税人の生活はお世辞にもほめられたものではなく、見た目で言えば真面目なパリサイ人に軍配が上がりそうなものです。しかし神に義とされたのはこの取税人のほうであつたとは、聞いていた人たちも私たちも啞然とするのではないのでしょうか。それは全ての人が生まれた時から身につけてきた律法主義的な価値観と相反するからです。しかし神の国は(おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる)世界です。もしクリスチャンの間でも見栄えや出来栄で評価されるなら、そこは神の国ではないでしょう。神の前に自分は何者でもないことを認めることが評価されるのです。

## 結論

では神に義とされる道とは何でしょうか。それは「人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認め」ることにはなりません(ガラテヤ2・16)。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

9 名指しはしていないが、イエスは明らかにパリサイ人に対してこの譬えを語っており、ここに彼らの特徴がにじみ出ている。自分を義人だと自任して 彼らは自らの義に確信を持っている。その姿勢は実は神に頼る行為ではなく自らに頼る行為へと促すものであり、それは私たちにも起こりうる姿勢である(Ⅱコリント10・7)。もう一つの特徴は、他人を見下している 点である。

10 パリサイ人 「分離された者たち」の意。由来は諸説あるが、彼らが律法、特にモーセ五書に記されている「聖め」の厳守において、聖くない者から「自らを分離する者」であったという説が一般的である。これは外から付けられたあだ名であった。取税人 ユダヤ人は取税人を、外国、特にローマ政府のために働く人間であるという理由から「罪人」「異邦人」「遊女」同様憎んでいた。

11 パリサイ人は立って、ひとりてこう祈った まず、パリサイ人の祈りの言葉に先立って、祈りの姿勢(身体的姿勢、霊的姿勢とも)が語られる。立って 立って祈

るのは、当時のユダヤ人の祈りの通常の姿勢である。しかし、ルカはここでただ単に身体的姿勢を語るのではない。「立ち」(13)より強い言葉、すなわち「自分を立てる」という意味で用いている。彼は人々の注目を集めるために、なるべく目立つところに立って、信心深そうな態度で祈ったのである。ひとりて「心の中で」(新改訳、新共同訳)。この祈りは自分自身に向かった祈りであって、神にささげられた祈りではなかった。それはもはや祈りではなく、独白とでもいえるものであり、「立って」という姿勢と重ねると、演技とでもいえる行為であった。

神よ、わたしは…感謝します パリサイ人は、自らの功績を列挙する(12)のに先立って、自分以外の人間がいかに多くの罪を犯しているかを数え上げている。ここにおける祈りの姿勢は、自分と他人との分離(パリサイ)である。

12 他の人々のようではないことを切々と語った後、自らがどんなに律法を忠実に守っているかを説く。一週に二度断食 律法は、年に一度の断食を規定している(レビ16・29)が、パリサイ人は、ユダヤ人皆のため、月の週の二度断食したようである。全収入の十分の一をさ

さげて 律法は、穀物畑と果樹園と群れの収入の十分の一に限っていたが、パリサイ人は、律法の規定のない「はつか、うん香、あらゆる野菜」の十分の一もささげていたようである。

**13 取税人は遠く離れて立ち** 祭壇から遠く離れたのか、それとも人々から遠く離れたのかは諸説あつて定かではないが、いずれにしてもパリサイ人の自信に満ちた堂々たる態度とは対照的である。**目を天にむけようともしない**で 通常のユダヤ人の祈りは、目を天に向けるのが一般的であつた。「ユダヤ人は通常、手のひらを上に向けて、腕を広げて、あたかも天の賜物を受け取るように、そして目も上げて立つた」(ファラー)。**胸を打ちながら** この行為は、罪に対する深い後悔と悲しみの念を表す所作であつた。これらの祈りの行為から、この取税人の、罪のゆえに神のみもとに近づいて祈る道を閉ざされた自らの、苦悩と絶望の姿が見て取れる。**罪人のわたし** 単に「すべての者は罪人である」という意味ではなく、他でもないこの罪人のわたし、という意味が含まれた強い言葉で語られている。**おゆるしください**(ギ)ヒラスコマイ) は、和解する、あがなう、償う、赦すといっ

た意味で、特に霊的な苦しみに対して向けられている言葉である。すなわち、罪に苦しむ者を赦し、贖い、和解される神のあわれみを求める言葉なのである。

なお、この両者の祈りの更なる相違は、「わたし」という言葉にある。パリサイ人の祈りにおいて、「わたし」は常に主語として用いられていた。一方取税人の祈りにおける「わたし」は、「わたしを」という目的語として用いられていた。取税人は、自分自身に関して何も語ることはできない。彼は、自らを神の赦しの中におかなければ、生きることも死ぬこともできない弱い罪人として、ただ神のあわれみのみを乞い求めているのである。

**14 あなたがたに言うておく** 何か重要な宣言を、權威をもつて語るときの慣用句(10・12、24、11・9、51、12・4、5、8、等)。**神に義とされて** 義とされるとは、神と人との正しい関係を表す言葉で、神のみこころになつてそのご支配の中に受け入れられる、という意味を表す。直訳は「神によつて正しいと宣言された者、正しいと認められた者」となる。

**参考図書** 11月11日分と同じ。

## 聖書

ルカ18・9～14

## タイトル

パリサイ人と取税人

## 暗唱聖句

神様、罪人のわたしをおゆるしてください。

ルカ18・13

## 目標

砕かれた心で神の赦しを受け取るものとなる。

## 導入

(後藤 真)

みなさんは、自分は正しい人だと思いますか。自分の考えはぜったいにまちがっていないと言えますか。イエス様のまわりには、自分は神様の前に正しい人だと思ひこんで、まわりの人を見下している人がいたようです。イエス様はそんな人たちにこんなお話をしました。

## ふたりの人のお祈り

ふたりの人が神殿にやってきました。お祈りするためです。ひとりはパリサイ人。そしてもうひとりは取税人でした。パリサイ人は、聖書の教えを一生懸命守る人たちでした。でも少し行き過ぎたところがあって、自分たちの決めた規則を守らない人を見下していました。

取税人は税金を集める仕事をしていました。取税人の中には、決められている税金よりもたくさん集めて、自分のお金にする人もいました。それでみんなからは罪人と言われて嫌われていました。

パリサイ人は立ってお祈りしました。「神様。わたしはほかの人たちのようなよくばりな者、不正な者、姦淫をする者でなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します。わたしは一週間に二回断食をしています。またすべての収入の十分の一をささげています」パリサイ人は自分がどれだけ立派な人なのか自慢するようにお祈りをしました。

取税人は遠く離れて立ち、目を上に向けようとしないうで、胸を打ちながらお祈りしました。「神様、わたしは罪人です。お赦してください」取税人は、自分がどんな人間か考えると、神様に顔も向けられない気持ちだったのでしょうか。

## 神に義とされた人

みなさんは、パリサイ人と取税人どちらが正しい人だと思いますか。パリサイ人は聖書の教えを守っていたか



ら正しくて、取税人はどろぼうのようにお金を取っている人もいたから罪人だと思いませんか。イエス様はこう言いました。

「あなたがたに言うておきます。神様に正しい者としていただいて自分の家に帰ったのは、この取税人でした。パリサイ人ではありません。自分を高くする人は低くされます。自分を低くする人は高くされるのです。」

イエス様の言うことは、なんとなくわかる気がしませんか。「わたしはこんな立派なことをしています」とか「あの人みたいに罪人でないことを感謝します」なんてお祈りする人がいたら、とてもいやみな感じがします。もし友だちの中に「ぼくはいつもいい子だよ」「○○くんみたいに悪いことをしないからね」と言う人がいたらいやだなと思うでしょう。

パリサイ人が聖書の教えを守っていたというのほうではありません。一週間に二回の断食は、決められていたものよりも多いものでした。すべての収入の十分の一の献金も、他の人よりも多いものでした。でも、イエス様はパリサイ人の行いだけではなく、どんな気持ちで聖書の教えを守っていたのかということも見ておられたの

です。

### へりくだる心

パリサイ人になくて取税人にあったもの。それは、自分を低くする気持ち、へりくだる心でした。神様の前に自慢するのではなく、自分が罪人であると正直に認める気持ちでした。

わたしたちはどうでしょうか。神様の前に自慢できくら立派な行いをして毎日を過ごしていますか。礼拝や献金をしているから、教会に来ていない友だちよりも正しいことをしていると、見下す気持ちになっていませんか。そんなわたしたちも、兄弟でけんかをしたり、友だちをねたんだり、神様に喜ばれないことをしていることがあるのではないのでしょうか。

イエス様は、本当は神様に隠したいことがあるのに「ぼくは正しいんだ」「わたしは間違っていないわ」と、高ぶることが嫌いです。わたしたちも取税人のように、自分の本当の姿を認めて素直に悔い改める人にしていただきたいと思います。

♪イエス様ごめんなさい♪ (PW14、イン33)



# 聖書 ルカ17・11～19 テーマ いやされた十人の病人

## 序論

(福井文彦)

ルカ独特の記事で、当時、この重い皮膚病は恐ろしい病気とされていました。その重い皮膚病の人、十人をイエスがいやされました。ところが、そのことをイエスの所に帰って来て感謝したのは、九人のユダヤ人ではなく、サマリヤ人ただ一人だけでした。

## 一、主にいやしを求めた

イエスはエルサレムに行かれるとき、サマリヤとガリラヤとの境に沿って東に向かわれました。そのイエスがある村に入られるとそこにいる十人の重い皮膚病の人たちに出会われました。当時、重い皮膚病にかかった人は、〈彼らは遠くの方で立ちどまり〉とあるように、律法によって一般の人々に近づいてはならないと決められていたのです。そのために、「汚れた者、汚れた者」と叫んで、人が近づくのを防がなければなりませんでした(レビ13・45～46)。

ですから、重い皮膚病の人ほど孤立無援なものはいな

かったのです。ところが、16節で明らかのようにその中に一人のサマリヤ人がいました。ユダヤ人とサマリヤ人は本来犬猿の仲で、敵対していました。しかし、重い皮膚病ということで社会から疎外されているという同じ境遇のために、一緒に過ごしていたのです。

彼らはイエスにお出会いと、このお方なら何とかしてくださるに違いないと信じた。それで、声を張り上げて「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」と哀願したのです。

## 二、見ないで信じる信仰

たぶん彼らは、イエスがそれまでに病人に手をつけていやされたことを聞いていたと思います。ところがイエスは彼らをご覧になつて不思議なことを言われたのです。(祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい)と。

普通なら、まず、重い皮膚病がいやされるのを見て、祭司がきよめの儀式をします。それがすむと、はじめて彼らは一般の人との共同生活、すなわち社会生活が許され、営めるようになるのです。ところがこの時には、重い皮膚病はいやされていませんでした。それなのに、イエスは(祭司たちのところに行つて、からだを見せなさ

い」と言われたのです。何とも不可解な命令です。

この重い皮膚病の十人は、「イエスが、〈祭司たちのところに行つて〉、と言われたのだから、必ず道の途中でいやされるに違いない」と、見えるところによらないで主の言葉を信じたのです。そして、イエスが言われた通りに従いました。すると、〈行く途中で彼らはきよめられた〉のです。

重い皮膚病がいやされたことをお互いが確認した時、彼らは嬉しくて嬉しくて跳び上がって歓喜したことです。

### 三、恵みへの感謝

これらの十人の重い皮膚病の人のうち九人は、いやされたことを喜びながらも、いやしてくださいだったイエスに感謝するために帰って来ませんでした。病気がいやされるという外側に表われた奇跡は、彼らの救いとはならなかったのです。

ところが、〈そのうちのひとり〉は、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。これはサマリヤ人であった。サマリヤ人だけは、祭司のもとに行つてき

よめられた証明をしてもらう前に、イエスの所に帰つて来ました。

そして、感謝にあふれて「いやし」よりは「いやし主」、「賜物」よりは「与え主」と、イエスのもとに帰つて来て、大声で神をほめたたえました。すなわち、神に栄光を帰し、遜ひたつて主の霊の恵みを受けるために心を開きました。ここに〈ひれ伏して〉とありますが、これは「自分の一生を神にささげる」という決意の表明です。

するとイエスは、〈立つて行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ〉と言われました。今や彼は、重い皮膚病がいやされる以上に大切な魂の救いをいただき、新しい人生を歩み出したのです。

### 結論

クリスチャン・ライフの特徴は感謝です。サマリヤ人のように主イエス（十字架）によって罪を赦ゆるされ、きよめられた私たちは、永遠なる究極的救いの恵みに生きる者とされたのです。これが純粹な感謝のゆるがない根拠です。すなわち私たちは聖霊とみ言葉により、環境の変化によって左右されない恵みへの感謝に生きる者とされたのです。

## 研究資料

(小平德行)

重い皮膚病のいやしの出来事であるが、ユダヤ人とサマリヤ人の姿勢を対比する事により、神の求めている信仰がどういふものであるかを教えている。

## テキスト

11 エルサレムへ行かれるとき ルカ9・51からはじまるエルサレムに上る旅の途中。サマリヤとガリラヤとの間を通られた ガリラヤはユダヤ人が住み、サマリヤはサマリヤ人が住む地域であり、両者は互いに敵同士だと思ひ、交流がなかった。サマリヤ人はエルサレムへ向かうイエスを受け入れず(ルカ9・53)、ガリラヤは故郷ナザレのある地方で、イエスを受け入れない人々も多かった。したがって、この時、ご自分を受け入れない多くの人々の間を進んで行かれたことになる。しかし、重い皮膚病の人々はイエスを受け入れようとしている。

12 彼らは遠くの方で立ちどまり 重い皮膚病にかかった人は、律法によって、一定の距離を保たなければならぬ。また、自ら「汚れた者、汚れた者」と叫んで、人が近づくのを防がなければならなかった(レビ13・45

46)。16節で明らかにされるが、十人の中にはサマリヤ人もいた。ユダヤ人とサマリヤ人は犬猿の間柄であるにもかかわらず、彼らは重い皮膚病ということで社会から疎外されていたゆえに、一緒に過ごしていたのである。

14 祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい 重い皮膚病の人が、きよめられたと認められるための一般的な手続き。この病はきよさに関わることでゆえに、その患部が本当に治ったかどうか確かめるのは祭司であつた(レビ14・2～20)。イエスは、あたかも治つてゐるかのように行動することを命じることによって、彼らの信仰を試した。十人のうちにはサマリヤ人もおり、サマリヤ人にはゲリジム山に聖所があり祭司がいた。したがつてエルサレムの神殿に行く者と、ゲリジム山に行く者に分かれたであらう。行く途中で彼らはきよめられた。彼らがイエスの言葉に従つた時、いやしの奇跡は起こつた。かつてナアマンの重い皮膚病がきよめられた時も、信じて従ふことが必要だつた(列王下5・14)。同様に、この十人が、きよめられる前から祭司のもとに向かつてのは、見えるところによらず、主の言葉を信じたからである。彼らにはこのような信仰があつた。その信仰に

よって彼らはいやされたのである。

15 そのうちのひとりとは、…大声で神をほめたたえながら帰ってきて 彼が神をほめたたえたことは、彼がいやされたことが神のみわざであると理解したこと、このことをすべての人に喜んで知らせようとしたことを示している。十人の群れは病であった時は一つになっていたが、いやされた後は、ユダヤ人はユダヤ人、サマリヤ人はサマリヤ人に分離してしまった。

16、18 ひれ伏して 礼拝の姿勢を意味する。ほかの九人は、どこにいるのか この九人はユダヤ人であったと思われる。この他国人 聖書中ここにしかでてこない言葉で「ほかの生まれ」という言葉。異邦人改宗者はエルサレム神殿の一番外側まで近づくことができるが、その先は入れない。そのことを禁じるために、そこに立てられている立て札にこの言葉が使われていた。エルサレム神殿の神の恵みの中に入ることが許されているユダヤ人は、帰って来なかった。この神の恵みに近づくことを許されない「この他国人」ひとりだけが、神を賛美するために戻ってきたのである。ユダヤ人であるイエスが、このサマリヤ人である自分をも顧みて下さったということ

への驚きと感動が、この感謝と賛美の背後にあったのであろう。

19 あなたの信仰があなたを救った 病気が治るほどの信仰は、十人が十人とも持っていた。しかし、イエスの御国の力に真にあずかって救われる信仰は、感謝して神をほめたたえるために帰って来たサマリヤ人だけが持っていた。救った 新改訳では「直した」となっているが（新改訳2017は「救った」、直訳は「救った」である。イエスはこのサマリヤ人にいやし以上のことがなされたことを言おうとしたのであろう。いやしと救いは異なる。いやしの奇跡的な体験は、神を賛美し、イエスのもとに戻ってくるという心の中の大転換が起こらない限り、救いには直結しないのである。この心の中の転換をイエスは「信仰」と呼んでいる。九人のユダヤ人は、重い皮膚病がいやされてユダヤ人社会に復帰し、元の生活に戻っただけであった。彼らの姿勢はイエス・キリストの救いに対して示したユダヤ民族の態度にほかならない。これに対し、このサマリヤ人はイエスのもとに来て、新しい人生を歩み出したのである。

参考図書 10月7日分と同じ。

## 聖書

ルカ17・11～19

タイトル  
暗唱聖句

いやされた十人の病人

そのうちのひとり、自分がいやされたことを知り、…イエスの足もとにひれ伏して感謝した。

ルカ17・15～16

## 目標

受けた恵みに感謝し、神をほめたたえる者となる。

## 導入

(後藤 真)

お店にいくとよく、店員さんがお客さんに「ありがとうございます」と言っています。大阪では、お客さんも店員さんに「ありがとう」と言って買い物をしているのをよく見かけます。お礼を言うのは気持ちいいものですね。では、イエス様になにかしてもらったときにはどうでしょうか。みなさんは感謝していますか？

## 十人の人たち

イエス様はサマリヤとガリラヤの間を通ってエルサレムに行こうとしていました。サマリヤはイエス様たちユダヤの人と仲が悪いサマリヤの人たちが住んでいると

ころでした。

その村で、イエス様たちは十人の人に出会いました。この人たちは重い皮膚病にかかっていた。そのころ、この病気の人は、人に近づいてはいけませんでした。薬や良い治しかたがなかったので、人にうつさないためでした。

この十人にはユダヤの人とサマリヤの人が混ざっていました。ふつうユダヤの人とサマリヤの人は付き合いません。でも同じ病気で苦しんでいる仲間として、いっしょにいたようです。

## イエス様!!

十人の人たちは、遠くから大きな声でイエス様に叫びました。「イエスさま、わたしたちをあわれんでください！」イエス様は十人の人たちを見ました。そしてきつとかわいそうだと思ったのでしょうか。そこでイエス様は「祭司のところに行つてからだを見せなさい」と言いました。この病気が治ったかどうかは祭司が確かめることになっていたのです。

十人の人たちはまだ病気が治っていませんでしたが、

言われた通りに祭司のところにっこうとしました。それくらいこの人たちはイエス様が病気を治してくれることを信じていたのです。そして何と、祭司のところにっこう途中で十人全員病気が治って、からだがきれいになりました。神様が病気を治してくださったのです。

### ほんとうの信仰

「あれ？ ぼくのからだ、治っている！ すごい。これは神様が治してくださったんだ。」と、病気が治ったことに気がついたひとりとは、「神様感謝します！」と神様をほめたたえながら急いでイエス様のところに戻りました。そして、イエス様の足もとにひれ伏して感謝しました。

イエス様は言いました。「治ったのは十人全員ではなかったのですか。ほかの九人はどこにいるのですか。神様に感謝するために帰ってきたのは、このサマリヤの人だけですか。」

ユダヤの人たちは神様を知っていました。それなのに病気が治ったことを神様に感謝するのを忘れていたのです。サマリヤの人たちは、昔は神様を知っていましたが

長い歴史の中でいろいろなことがあり神様がわからなくなっていました。でもサマリヤの人だけが神様に感謝するために帰ってきたのです。ユダヤの人たちは、サマリヤの人たちを「神様をちゃんと礼拝しない人だ」と見下していました。ここではサマリヤの人のほうが神様を礼拝したのです。

イエス様は言いました。「立って、行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」このことばで、イエス様は本当の信仰が何かを教えてくださいました。病気が治ること、神様が自分の言うことを聞いてくれることを信じるのが信仰ではありません。神様を知らない人が、神様をほめたたえて生きる人に変えられるのが信仰なのです。

たったひとりイエス様に感謝をしたこの人は、病気が治っただけではなく、神様を礼拝して生きる人生に変えられました。これが本当の信仰、本当の救いです。みなさんは神様から何をもらいましたか。イエス様にどんなことをしていただきましたか。この素晴らしい神様とイエス様に感謝し、礼拝していますか？

♪すばらしい神様♪ (PW 23)

# 聖書 ルカ1・26〜38 テーマ マリヤへの受胎告知

## 序論

(金井信生)

救い主キリストをこの世に生まれさせるために神が選ばれたのは、ひとりの女性マリヤの信仰でした。御使いの知らせは、マリヤを戸惑わせるものです。その言葉通りに進めば、予定されていた結婚が中止になるどころか、死罪の可能性もあります。しかし御使いの言葉に、マリヤは「お言葉どおりこの身に成りますように」と答えました。

## 一、お言葉の真実を知っているから

聖書の歴史を振り返ると、神がなされることは、人間の知恵や理解を超えていますから、驚かされることばかりです。常識的にただ信じられないというだけでなく、従っていこうとすれば、苦しみが待ち受けているのはわかっており、涙の覚悟も必要かもしれせん。しかし、約束されているのは永遠に渡って豊かな神の祝福です。

マリヤは、46節からの賛歌にも表れているように、旧

約聖書の言葉をよく心に留めていました。その中には詩篇84・6の「彼らはバカ（涙）の谷を通っても、そこを泉のある所とします」や、16・6の「測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた。まことにわたしは良い嗣業<sup>しぎょう</sup>を得た」、このような言葉もあったことでしょう。またヨブの、「われわれは神から幸を受けるのだから、災をも、うけるべきではないか」（ヨブ2・10）と妻を諭した言葉もあります。

神が与えてくださることを、み言葉によって喜び受ける、そこにマリヤの信仰がありました。

## 二、神が共におられる

御使いガブリエルがこれから起こることを告げた言葉の内容は、マリヤが身ごもって男の子を産むということと、その子が神の子、救い主であり、大きな働きをすることです。しかしマリヤにとっては、まだヨセフと一緒にない自分が身ごもることへの心配がまずありました。

ガブリエルが「おめでとう」（喜びなさい）と言ったのは、子どもが生まれることや、その子どもが偉大な存在になることではありません。（主があなたと共におられ）



ることです。神は、私たちが心配しやすく、不安に陥りやすいことをご存知です。旧約において、ご計画を示される神は、用いようとする者に何度も「わたしが共にいる」と語りかけて、力づけてくださいました。

どんな人でも、だれからも理解されない寂しさや、何を頼りにしたらよいかわからなくなる不安をおぼえる時があります。その時に共にいてくださるのが、私たちより大きく重い痛みを経験された主キリストです。マリヤは、お言葉に従ってキリストを生むことにより、「神が共におられる」恵みを知ることができました。この恵みは、無力な私たちを力づけて、本来、人にできないことをさせてくださる力を与えます。

### 三、自ら主を喜ぶ

マリヤが答えた、〈お言葉どおりこの身に成りますように〉との言葉は、告げられた言葉に対して思い悩んだり不安があっても、神様のご計画に従うほうを選ぶということです。それはこの世での苦しみから逃れるよりも、神様の御顔を失うことのほうが魂にとって苦しみであるからです。マリヤからお生まれになられたキリストも、十字架の痛みにまさって、父なる神が御顔を背けら

れたことに苦しまれました。

神の祝福の御手を遠ざけていたのは、私たちの罪であり悪でした。しかし愛に満ちた神は、私たちのすべての罪を御子キリストに負わせて十字架に捨ててください、わたしたちの罪を赦してくださいました。マリヤの信仰は、「父よ、…わたしの思いではなく、みこころが成るようになしてください」（ルカ22・42）、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」（23・46）と祈られたイエス様をこの世に生み出すために必要な、神の喜ばれる信仰でした。

「お言葉どおり」が形に現れるのが礼拝であり献身です。神の言葉を聞き、自分のからだを「神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物として」（ローマ12・1）ささげる霊的な礼拝、それがマリヤの応答に現れています。

わたしたちも神の言葉を、恵みの知らせとして受け入れて喜びましょう。人間の思いを越えた神のすばらしい救いの御業を見、豊かな祝福を受けることができます。

### 結論

神がみ言葉を通して示される御計画に、祝福が約束されていることを喜びましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

四福音書の中では、主にマタイとルカが主の降誕の出来事を記している。一方マルコは、主イエスの公生涯の開始を福音書の書き出しとし、ヨハネは降誕物語の意味をヨハネの視点から語っている。この個所を通して私たちは「神にとって不可能なことは一つもない」という、神の全能性と、それに対するマリヤの受容・従順さを伝えたい。

## テキスト

26 六か月目に エリサベツがバプテスマのヨハネをみごもつて六か月目（5〜25）。

27 ヨセフ 「主は加えたもう」という意味。ダビデ家の末裔で、ベツレヘム出身であった。大工を家業とし、ガリラヤのナザレに定住していた（2・4、マタイ1・18、13・55）。ヨセフの系図は聖書中2か所登場する（マタイ1・1〜16、ルカ3・23〜38）。メシヤはダビデの家系から出ることが、旧約の時代から預言されていた（サムエル下7・12〜13、イザヤ9・6〜7他）。いいなづけユダヤの「いいなづけ」は、事実上法的な「妻」。

28 おめでとう 直訳すると「喜びなさい」となる。ただの挨拶の言葉ではなく、喜びや恵みの伴った挨拶の言葉として用いられる。同時にこの喜びや恵みは、聖書では苦難を伴った喜び、あるいは苦難の最中の喜びとして描かれている（ヨハネ14・28、コロサイ1・24他）。マリヤがこの御使いの申し出を受けることは、人間的にはこの上ない苦しみをも受けることに他ならない。

30 ここにきて、28節の「恵まれた女」という言葉が具体化される。御使いは、マリヤに神のご計画を打ち明けたのである。注意すべきは、この神のご計画の中で、天使は彼女の腹を借りたいというお願いに來たのではない。有無を言わず、告知に來たのである。しかも、この場合の神の言葉を受け入れることは、ヨセフの愛も世間の信用も、場合によっては自らの命も失いかねないほどの申し出であった（28）。しかしマリヤはその申し出を受け入れたのである。マリヤはこの信仰によって讃えられたのである。恵み 先週のザカリヤに対する第一声が「あなたの祈が聞きいれたのだ」（13）という、祈りの結果としての成就であったことは対照的に、マリヤに対しては、一方的な神からの選びの結果としての

語りかけとなっていることは注目したい。

31 イザヤ7・14の預言の成就。マリヤの子が真の神であり、また真の人であることを示す。

32〜33 ダビデ契約の成就（サムエル下7・12〜16、イザヤ9・7他）。

34 どうして この語を直訳すると「どのような方法で」となる。マリヤはあくまで方法を尋ねたのであって、疑いの言葉ではない。一方ザカリヤの「どうして」（18）とは、「何によって」（新改訳、新共同訳他）ともあるように、しるしを求める疑問文である。結果、マリヤは次節においてその方法を御使いによって懇ろに語られ、ザカリヤは口がきけなくなった。あるいはこの両者の相違は、ザカリヤが祭司という職についている者であったのに対し、マリヤはガリラヤの一般人であること、またザカリヤが人生経験の豊富な老人であったのに対して、マリヤがまだ少女であったことにも由来するであろう。

35 聖霊があなたに臨み 前節のマリヤの問いを受けて、この懐胎が聖霊によるものであることを強調する。

マリヤの処女懐胎は聖霊の創造のわざであり（創世記1・2）、主の霊の創造行為である（エゼキエル37・1

〜14）。**おお**う 直訳は「陰を落とす」「陰がかかる」という意味であり（使徒5・15）、旧約では、主の栄光の雲（出エジプト40・35）に、そして新約では変貌山（<sup>へんぼう</sup>）における栄光の雲（マタイ17・5）に現れる。いと高き者の力（ギデユナミス）ここからダイナマイトという言葉が派生した。人間の想像を超えた神の力である。

36 エリサベツの懐胎は、マリヤの使命、すなわち神の子の母となるという使命のしるしでもあった。しかも、エリサベツの懐胎が、神の超自然的な介入による懐胎であることを強調することによって、マリヤの懐胎も強く神の超自然的な懐胎であることを示しているのである。

37 創世記18・14の引用。こと（ギ）レーマ 次節の「お言葉」と同じ言葉が用いられており、言外に「あなたの言われたこと」という意味が含まれている。

38 はしため 文字通りには「女」奴隷の意味。お言葉どおり… マリヤのこの服従のゆえに、彼女は理想的な女性の典型とされたのである。

参考図書 A. T. Robertson, Word Pictures in the New Testament Volume II. The Gospel According to Luke (Broadman) 他

## 聖書

ルカ1・26〜38

タイトル  
暗唱聖句マリヤへのみ告げ  
わたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身になりますように。ルカ1・38

## 目 標

神のご計画に従って従順に生きる者となる。

## 導入

(和田牧子)

今日は、十二月第一日曜日です。イエス様のお誕生を待ち望むアドベントを迎えました。十二月に入ると、何となくわくわくするような、楽しい気持ちになりませんか。教会はもちろん、街中でクリスマスツリーが飾られ、寒い毎日んだけど、心が暖かくなるような。でもクリスマスの本当の意味を知っている人は、案外少ないのです。そのことを、アドベントの期間ぜひ確認しましょう。

## 神様の選び

今日のお話の登場人物は、マリヤという名の女の人です。女の人というより、少女といったほうがよい十代半ばの人でした。ナザレというガリラヤの貧しい町に住んでいました。マリヤは人里離れた町に住む無名の少女

だったのです。

さてマリヤは、神様を信じる心優しい人でした。そしてマリヤにはもうじき嬉しいことが待っていました。大工のヨセフと結婚するのです。ヨセフも神様を信じる信仰深い人で、二人は結婚の日を指折り数えて過ごしていました。

## 天使のみ告げ

そんなある日のことです。マリヤのところにみ使いガブリエルが来て言いました。

「恵まれた女よ、おめでとう。主があなたと共におられます」。

マリヤはびっくりしました。これはいったいどういうことだろうと胸をドキドキさせて考えこんでいました。するとみ使いは言いました。

「恐れることはありません。あなたは神から恵みをいただいているのです。あなたのお腹には赤ちゃんが与えられ、男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。彼は非常に偉大な人となり、神の子と呼ばれます」。

みなさんだったらどうですか？ いきなりこんなこと

を言われたら、びっくりしますね。マリヤは思わず、「どうして、そんな事があり得ましょうか。わたしはまだ結婚もしていませんのに！」と言いました。もうすぐヨセフと結婚する予定ではありますが、まだ結婚したわけではありません。

しかしみ使いはこう教えてくれました。

「聖霊があなたにくんだり、神の力があなたをおおうでしょう。ですから生まれてくる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。あなたの親戚のエリサベツも、大変年をとっているのに、神の力によって子を宿しています。神にはなんでもできないことはありません」。

### マリヤの信仰

マリヤはみ使いの言葉を聞きながら、心の中でいろいろと考えたことでしょう。まだヨセフと結婚もしていないのに子どもが生まれるなんて分かったら、ヨセフや周りの人はどう思うだろう。「裏切り者！」と、ヨセフはわたしから去っていくかもしれない。また、人々からは「不倫の女！」とののしられ、石打ちの刑で殺されるかもしれない。

どうしたらいいのかしらと思いいめぐらすうちに、マリ

ヤは信仰の目を上げたのです。人のことを気にするより、神様に従うことのほうがずっと大切なことだと気づきました。そこで、マリヤはきつぱりと答えました。

「わたしは主のしもべにすぎません。お言葉どおりこの身に成りますように」。

これは「わたしは神様のものです。神様のおっしゃるとおりにしてください」という意味です。マリヤはすべてのことは神様のご計画の中にあるとわかり、神様に信頼してお任せしたのですね。

それで、み使いは彼女から離れていきました。

### 結び

神様は、ナザレの名も無い少女マリヤを、神様の御子イエス・キリストのお母さんとして選ばれました。マリヤはそれに対し、信仰をもつて素直に聞き従いました。神様は私たちをおして神様のすばらしさを現そうと、使命や人生の計画を用意してくださっています。それは何なのか、よくよくお祈りして、私たちも神様のご計画に従っていきましょう。

♪信仰はなんてすばらしい♪ (GS 25)

# 聖書 ルカ1・39〜56 テーマ マリヤの賛歌

## 序論

(石田高保)

神の御子が聖霊によってマリヤのお腹に宿るということ  
は空前絶後の超自然的な出来事なので、人間がすんなりと  
受けとめることは決してできません。そのため神様は御使  
を派遣してマリヤを説得し、エリサベツによってその裏付  
けを与えました。そのプロセスをとおして彼女は神のミッ  
ションを受け入れ、魂の底から神をほめたたえます。これ  
が世に名高いマリヤの賛歌です。

## 一、信仰者による助け

ここはイエス様がマリヤのお腹にいらするときの出来事  
です。聖霊によって神の子を身ごもったという事実を世間の  
いったい誰が信じるだろうか、婚約者のヨセフにも打ち明  
けられる内容ではない、と戸惑っていると、御使ガブリエ  
ルはマリヤに助け舟を出します。親戚のエリサベツが年を  
取ってから身ごもり、6か月にもなっているという事実を  
告げたのです。神様に不可能はない、と説得されてマリヤ  
は神の子を身ごもるという大任を引き受けます。十代の女

性が負うにはあまりにも重いミッションであったので、神  
はエリサベツというベテランの信仰者を用意したのでしょ  
う。これを聞いたマリヤは居ても立ってもいられず、何十  
キロの道をものともせずエリサベツに会いに出かけます。  
このとき、マリヤと同じような境遇にあり、自分の気持ち  
を打ち明けられる相手はエリサベツのほかにはいませんで  
した。肝胆相照<sup>かんたんさうしやう</sup>らす仲と言うように、二人は神の著しいお  
働きを体験し、お互いに慰めと励ましを必要としていたの  
です。自分の経験した超自然的な出来事を心から理解して  
くれる人を神は用意して下さいました。

エリサベツから「主のお語りになったことが必ず成就す  
ると信じた女は、なんとさいわいなことでしょう」と言わ  
れてどんなに力づけられたことでしょう。エリサベツは  
自分に語られた神の約束が成就しつつあることをマリヤに  
証しすることによって、マリヤに語られた主の約束も必ず  
成就すると確信させたのです。これから三か月間、エリサ  
ベツのところ滞<sup>とど</sup>在して聖徒の交わりの中に過ごしまし  
た。この交わりがナザレに帰ってから受ける世間の冷たい  
風を耐えさせたのかもしれない。

神様が自分にどんなに素晴らしいことをして下さったか



は、人になかなか理解してもらえないかもしれません。偶然として片付けられてしまうこともあるでしょう。しかしクリスチャンのお互いにあつては、小さいと思える変化も出来事も、神の恵みとして感謝し合えます。そこがこの世ながら神の国というものです。私たちもキリストのからだとして、ほかのキリスト者との交わりを必要としています。うわべだけでなく、恵みと課題を分かち合い、心と心の響き合える信仰の友を持ちましょう。

## 二、賛美による助け

マリヤはエリサベツの言葉を神様からのメッセージとしてすぐに受け入れます。そして聖霊の感動を受け、魂の底から主を賛美します。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救主なる神をたたえます」。ここに聖霊による喜びがあふれ出しています。御使とエリサベツの言葉に励まされた喜びです。「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました」、これはエリサベツの境遇とも似ています。神はなぜ自分のような無きに等しい者を偉大なミッシヨンのために選んでくださったのか、と畏れ多い思いを表現しています。「力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださいましたから」、処女にして聖霊によって身ごもるという理

解され得ないことも、苦渋の選択ではなく、積極的に受け取っています。マリヤは身ごもったばかりなのに、すでに救い主が生まれたかのように信仰によって受け取っています。先取りの信仰であり、未来完了形の目で見えているわけです。私たちも祈っていることも、難しいと思える課題こそ完了形にしてみましよう。希望の持ちにくい時代にあつて、この信仰はいよいよ輝いてきます。自分を勇気づけるだけでなく、他の人をも勇気づけることができます。

「主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし」、十代の女性が歌うにはスケールが壮大ですが、それだけに聖霊によって感動されていることを証ししています。「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(1ペテロ5・5)とあるように、神の前に自分を貧しくし、主の恵みにすがる姿こそ祝福の原則ではないでしょうか。

## 結論

マリヤは危機的な状況においてエリサベツをとおして神様の憐れみと励ましを体験しました。私たちも誰かにとつてのエリサベツでありたいと思います。



## 研究資料

(加藤 満)

詩人のトマス・カーライルは、マリヤ讃歌について「永遠の危機に際して 我らは無視することにした マリヤの讃歌の 雷鳴と共鳴を その革命的な響きを」と逆説的に「社会変革による贖い」の衝撃を歌っている。真実な神の愛はいま、世界を変革し続けているのである。

ルカ福音書において、ここまでバプテスマのヨハネとイエスの誕生物語が個別に述べられてきたが、この段落で二人の母親の出会い、更には胎内の子ども同士の出会いを通して、二つの物語が合流している。

この段落全体はマリヤのエリサベツ訪問・マリヤへのエリサベツの祝福(39〜45)と、それに応答するマリヤの賛歌(ラテン語でマグニフィカート、46〜55)の二つの部分から構成されている。後半のマリヤの讃歌は、マリヤの個人的な感謝(46〜50)とイスラエルについての神の救いの業(51〜55)に区分でき、両者はいくつか重要な表現を共有しつつ、いずれも「神のあわれみ」のモチーフによって結ばれている。

## テキスト

39〜45 マリヤのエリサベツ訪問は、出産前に帰還している(56)ことから、お産のお手伝いというよりも、受胎告知を受けた彼女の驚きと喜びの表れであった。胎内でおどった エリサベツの胎内の子どもはマリヤの胎内の子どもを認知している。**聖霊に満たされ** 聖霊によりエリサベツは自分の子どもが胎内で踊った事の意味を悟ったのである。ちなみに聖霊はルカ文書で中心的役割を担っており、聖霊に導かれる行為が神の救いの目的の連続性の中にある事を確認する。**女の中で祝福されたか** 直訳では「女性の中で最も祝福された」と最上級で記される。**主** 原文では「私の主」。エリサベツはマリヤの子どもがメシヤ(ヨハネ1:41、4:25参照)となる事を認めていた。**信じた女** 主の言葉が必ず実現すると信じたが故にマリヤは幸いである。天使の告知を受け入れなかったザカリヤとは対照的に描かれており、信仰の重要性の強調がある。エリサベツにマリヤへの嫉妬心が全く無いことは注視すべきである。神がマリヤに対してより大きな祝福を与えている事を、エリサベツは比較せず一人の女性として神の前に遜って認めたのである。

46、50 魂と霊 は詩的並行法で、ほぼ同様の意味である(イザヤ26・9参照)。あがめ は習慣的行為と見られるが、**たたえます** は不定過去時制で特定の過去の出来事を根拠に喜びたたえている。おそらくマリヤは受胎告知を覚えて賛美した。その賛美は、神が卑しい女(ルカ1・38、サムエル上1・11参照)に目を留めた点に根拠を置いている。**卑しい女** 「女奴隷」を意味する言葉で、主人への完全な従順を示している。マリヤは自身自身を取るに足りない者とする。しかし、それは問題ではない。何故なら、「強力な方」が働いているからである。**名** は全人格を表す。ここでは神の名を敬虔に用いなければならぬと言っているのではない。マリヤは「神は聖なる方である」と告白しているのである。

51、56 後半は6つの不定過去時制がたて続けに用いられている。マリヤは神の一般行為を語るのではなく、特定の場面を思い出しつつ語っているのかもしれない。歌のこの部分は、価値観が完全に逆転される事を語る。決定権を持つのは高ぶっている者でも権力ある者でも富む者でもない。メシヤを通して、神はこれらの者を全て転覆させようとしておられる。**飢えている者を…飽かせ、**

**富んでいる者を…帰らせなさい**ます 革命的な言葉である。古代世界において、富める者が良い待遇を受け、貧しい者は飢えを覚悟しなければならなかった。しかし、マリヤは、人々が何をするかによって拘束されない神について歌っている。神は人の態度と社会の秩序を覆される。ここでの**あわれみ**(ギ)エレオス)は、(ヘ)セドの概念が色濃く表れている。その意味は神の「契約に對する忠実さ」である。**アブラハムとその子孫と…約束なさったとおり**に イエスの誕生を通して現される神のみわざは完全に新しいみわざではない。神はアブラハム、更にはイスラエルとの契約を覚えておられた。そして、忠実にその約束を果たされたのである。

マリヤの讃歌は身分の低い者が高く上げられ、権力ある者がその座から引き下ろされ、そして両者が神の目的に完全に加わることを喜ぶ神を賛美している。この「逆転としての救い」は「神の国の福音」としてルカ福音書で展開する。**参考図書** レオン・モリス『ティンデル聖書註解 ルカによる福音書』(いのちのことば社)、J・B・グリーン、山田耕太訳『ルカ福音の神学』(新教出版社)、『聖書神学辞典』(いのちのことば社)その他。

## 聖書

ルカ1・39〜56

## タイトル

マリヤの賛歌

## 暗唱聖句

わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は  
救主なる神をたたえます。

ルカ1・46〜47

## 目標

真実な神の愛を覚え、神をほめたたえる  
者となる。

## 導入

(和田牧子)

先週のみ言葉を覚えていますか? 「わたしは主のは  
しためです。お言葉どおりこの身になりますように」と  
いうみ言葉でしたね。誰が誰に言った言葉でしたか?  
マリヤがみ使いガブリエルに言ったのでした。マリヤは  
まもなく聖霊によって赤ちゃんが与えられ男の子を産む  
ことを、信仰をもって受け入れたのです。

## エリサベツに会いに

マリヤは恐れおののきながらも、み使いの言葉をしっ  
かりと信じました。そしてまず取った行動は…?  
大急ぎで山深いユダの町に出かけていきました。マリ  
ヤのいとこエリサベツに会いにいったのです。

み使いはマリヤに、「あなたのいとこエリサベツも、年  
をとっておりながら子どもがお腹に与えられて、六か月  
になっています」と教えてくれました。マリヤは神様を  
信じている大先輩であるエリサベツに、どうしても会い  
たくなったのです。

「エリサベツさんこんにちは!」マリヤが家に入って  
あいさつをすると、何と、エリサベツのお腹の中の赤ちゃ  
んがビクビクッとおどりました。この赤ちゃんの名前は  
ヨハネくん。後にバプテスマのヨハネと呼ばれる、イエ  
ス様の働きの道ぞなえをした人です。

エリサベツは大喜びでマリヤを歓迎しました。

「あなたは素晴らしい恵みを受けましたね! 主のお母  
さまが私のところにおいでくださるなんて、なんと光栄  
なんでしょう。私のお腹の子も喜びおどりましたよ。主  
のお語りになったことが必ず成ると信じた女性は何と幸  
せなことでしょう」。

マリヤはエリサベツの言葉を聞いて、大変嬉しくまた  
ほっとしたことでしょうね。み使いの言葉を信じたもの  
の、まだ若いマリヤには不安や恐れがいっぱいだったと  
思います。でも「ああ、これは神様の祝福なんだ!」と

はつきりわかり、勇気づけられました。信仰がますます強められ、神様が守ってくださいるからだいじょうぶと安心することができました。

### マリヤの賛歌

そしてマリヤは心を神様に向け、賛美したのです。

わたしは心から主を賛美します。

神様はこんな小さなしもべさえ、お心にかけてくださいました。

力あるかたが、わたしに大きな事をしてくださったからです。

そのあわれみは、いつまでも主をおそれかしこむものの上にとどまります。

マリヤは、自分が弱くて小さな者にすぎないことをよく知っていました。けれども神様は力ある方で、そのあわれみ深いお心は、とても大きいことを信じていました。神様はわたしたち人間を愛し、救うために、この不思議なご計画を進めようとしておられると、察することができたのです。それはお腹の赤ちゃん、イエス・キリストによる救いのご計画でした。

マリヤはどこまでも心を低くし、神様に栄光をお返し

しました。そしてエリサベツの家で三か月ほど一緒に暮らししたあと、自分の家に帰っていきました。

### 主を賛美しよう！

マリヤとエリサベツ、二人はその喜びと感動を分け合いい、共に主を賛美することができ、嬉しかったでしょうね。みなさんも、同じ神様を信じているお友だちがいるなら、ぜひ一緒に祈りしたり、賛美をしてみませんか。賛美とは、神様をすばらしい救い主として、信じ、敬い、誉めたたえることです。

昨年のクリスマス、和歌山の教会に岡山の子ども賛美チームが伝道応援にきてくれました。二つの教会の子どもたちは神様を信じているものどうし、すぐに仲良くしました。沢山のゲームをし、賛美をいっぱい歌いました。新しい親子さんたちも来られました。その時教えてもらった賛美を、和歌山の子どもたちは何度もお家や車の中で歌っています。三歳のふたごちゃんも振り付けと歌詞を完璧に覚えてお家で歌っているそうです。

このクリスマスのとき、たくさんさんの賛美をもってイエス様のお誕生をお祝いしましょう。

♪うれしいクリスマス♪ (GS 45)

# 聖書 ルカ2・1〜7 テーマ 馬小屋で生まれたイエス

## 序論

(金井信生)

キリストは家畜小屋に生まれ、飼葉おけに寝かされました。神の子が生まれるのにはまったくふさわしくない場所です。しかし、救い主の使命を象徴する場所です。それは偶然でも不運でもなく、キリストはその場所を、私たちに神の愛を届けるために自ら選びとってくださいました。

## 一、貧しい生まれ

身分の低い者は、簡単には身分の高い人に近づくことはできません。でも立場のある人は、苦しんでいる人や困っている人を助けたり励ますために、時を選んで近づくことができます。

私たちはどんなに神を求めても神に近づくことはできません。ただ神が私たちに近づいてくださるほかありません。キリストが貧しい生まれをしてくださったのは、どんなに自分の罪に悩んでいても、重荷に苦しんでいても、その人に近づき、寄り添ってくださるためです。

自分は豊かだ、不足はないと思っているときは、キリストを求めず、永遠の救いを知らないままです。「苦しみにあつたことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」(詩119・71)と歌われているように、私たちも貧しさそのものを恐れることも恥じることもありません。主によって益に変えられるからです。

またキリストは弟子に謙遜を教え、下座を選びなさいと命じられました。そのためにご自身が最も低くなられ、従う生き方を示してくださいました。放蕩息子が落ちてゆくどん底を主は自ら経験し、そこからやり直して父のもとに帰ろうとする者を支えてくださっています。

## 二、閉め出されたキリスト

キリストの誕生を世の多くの人は知りませんでした。それはただ貧しい生まれだったからだけではありません。関心を持たなかったからです。

羊飼いたちはベツレヘムで、博士たちはエルサレムで、出会った人たちにキリストの誕生を伝えていきます。でも実際に出かけて行った人はありませんでした。みんな日々のことで忙しくしていたからです。

ローマの皇帝やヘロデ王のような身分の高い人たちがでなく、一般の人もキリストを迎える心をもっていますでした。

さらには神殿でシメオンが祈り、アンナが語り聞かせても、だれも興味を持ちません。礼拝をささげ、祈るために来ているはずなのに、主との生きた交わりを失っていたからです。

仕事のこと、生活のこと、さらには宗教を名乗っている人も、本人は良いことをしているつもりでも、自分の求めを満たそうとするだけで神の義も愛も遠ざけている人は、キリストを閉め出してしまっています。

### 三、主よ、私の心にお住みください

「人の子にはまくらする所がない」（ルカ9・58）とも言われたキリストが、ただ一度、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」（ルカ19・5）と声をかけられたのがザアカイです。ザアカイは金持ちでしたが、孤独で、人からは罪人呼ばわりされていました。しかし、イエス様を迎え入れたとき、ザアカイは救われ、その人生は新しくなりました。

私たちの心は汚れているかもしれません。心落ち着け

るときもなく、神に思いを向けることも少なかったかもしれません。でも、キリストは今も私たちの心の戸をたたいておられます。「良い」と受け入れてくださった恵みをたたえる、さらに主との深い交わりに導かれていくのです。

初めから心の中をすみずみまできれいにして、全部主に明け渡しなさいと言っているではありません。そんなことをしていたらとても主を迎えることはできません。主はわたしたちのことをよく知っておられます。汚い心のほんの一隅でも、まず主よおいでくださいと迎えることです。

日々の生活の中で、いつも主が共にいてくださり、私たちの思いを聞き、み言葉を通して語りかけておられることをおぼえましょう。主の導きに従って小さくても決心し、実行していくときに、主にある喜びがあふれ、人生が新しくされます。

### 結論

主はあなたと共に人生を歩みたいと願っておられます。心を開き、キリストを心と生涯にお迎えしましょう。



## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

1 アウグスト アウグストとは称号であり、本名はガイウス・ユリウス・カエサル・オクタ비아ヌス。もともと彼はカエサル(シーザー)の姪の子であったが、カエサルの養子となり、その死後、政敵であったアントニウスを倒して、1世紀の長きにわたった内乱を収めて、帝政ローマの初代皇帝となった。紀元前27年から紀元後14年の彼の治世の間に、ローマを中心とする地中海世界に軍事的平和と政治的安定、そして経済的繁栄がもたらされ、いわゆる「ローマの平和」を確立した。このような功績により、彼のおとずれは、当時「福音」(よきおとずれ)と称されていた。**人口調査** 他の聖書では「住民登録」(新改訳)、「登録」(新共同訳)と訳されており、口語訳聖書の語る人口調査の目的は、住民登録と人頭税の課税、そして戦時における徴兵のためであった。

2 クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査であった ルカは、当時の資料を丹念に調べて、できる限り正確に記録しようとしていたようである。

彼の福音書の中には歴史的な背景を示す資料が多数存在する。この個所も「歴史家ルカ」の真骨頂が表される。

さて、クレニオがシリアの総督であった時の住民登録は紀元6年であったと考えられており、マタイが記述する「ヘロデ王の代」(マタイ2・1)(紀元前37〜紀元4)という史実に反する。しかし、**最初の**とは、「前の」「先立つ」とも訳されている言葉であり、人口調査はおおむね14年おきに行われていたとされているから、聖書に記述された年代は、およそ紀元前8年頃のことであろう。しかし、当時の人口調査には数年を要したから、およそ史実と合致していると考えられている。

3 **登録をするために、それぞれ自分の町へ帰って行った** ユダヤ人は系図を重んじ、またよく知っていてもいた。ユダヤの住民登録は、おそらくユダヤの巡礼祭のような機会にあわせて「家系であり、またその血統」(4)でもある先祖の町に帰郷して登録する形をとっていた。それゆえ、その作業は手間のかかるものであった(2)。

4 救い主は、**ダビデの家系** ダビデの **血統** として **ダビデの町** で生まれると預言されている。その預言とは、キリストはダビデの子孫として生まれ(サムエル下



7・12(13)、「ダビデの町」ベツレヘムに生まれる(ミカ5・2)というものである。すなわち皇帝の勅令とヨセフの行動とは、図らずも旧約の預言を共に成就しているということになるのである。

5 身重になっていたいなづけの妻マリヤ 住民登録の対象は、成人男子に限られていた。しかし、ヨセフは婚約中に妊娠したマリヤを村人の非難や中傷から守るためにも、ナザレからベツレヘムまでの140キロメートルあまりの道連れて行くことに決めたのであろう。考えてみれば、身重のマリヤにとつては想像を絶する過酷な旅であったことは想像に難くない。道路事情や医療など、現代とは比べものにならないくらい劣悪な状況下での移動である。

6 月が満ちて ルカは、この言葉を預言の成就や期間の満了にも用いていることから、マリヤが臨月にはいったという、いわゆる肉体的な状況を描くだけではなく、神の約束の成就、神の時の到来をも指し示している言葉である。

7 救い主の誕生の瞬間は、**飼葉おけ**に寝かされた救い主の姿であった。降誕物語において、ルカだけが飼葉

おけの幼子を物語る(7、12、16)。飼葉おけは、貧しさ、小ささを物語っており、貧しい者、小さき者への福音を解き明かしたルカならではの表現といえる。しかし、なぜ救い主の誕生が「飼葉おけ」なのだろうか。それは、**客間には彼らのいる余地がなかった**からである。「客間」は、他の多くの聖書では「宿屋」と訳されており(新共同訳、新改訳、フランシスコ会他)、当時の宿屋は1階を家畜用のスペース、2階を客間としていたようであるから、この状況は理解できよう。救い主誕生の出発点は、客間からの閉め出しであった。

全ての時代そして全世界の救い主、王の王にして主なる神であるキリストが、客間から追い出され、飼葉おけに寝かされるということは象徴的である。ルカが描く救い主は、この世の貧しい者、取るに足りない者、弱者のための救い主の姿を私たちに知らせる。同時にこの姿は現代の忙しい私たちへのメッセージともなる。この世の事に忙しくしている私たちには、この「救い主」を迎え入れる「余地」はあるだろうか。クリスマス、そして年末の今だからこそ考えるべき事柄である。

参考図書 12月2日分と同じ。

## 聖書

ルカ2:1-7

タイトル  
暗唱聖句馬小屋で生まれたイエス  
客間には彼らのいる余地がなかったから  
である。

ルカ2:7

## 目標

心を開き、キリストを心と生涯にお迎え  
する。

## 導入

(土屋開夫)

皆さん、あつという間に今年も終わりですね。どうですか、子どもの皆さんも、もしかしたら「忙しい、忙しい、あー忙しいっ！」と思いながら、バタバタと一年を過ごした子もいるかも知れませんね。

最近の子どもは忙しいですね。学校、宿題、学習塾、スポーツや音楽の習い事。少しでも空いた時間はスマホやゲームやオモシロ動画。そんな皆さんの忙しい心の中や生活の中には、とても神様やイエス様が入る余地は無いかも知れませんね。どうですか？ ありますか？

でも一年の最後にいつもクリスマスのシーズンがあるのは、とても意味深いと思います。イエス様が、子どもも大人も、世界中の全ての人に「一番大事な事を忘れないで！」と語っておられる氣がします。

## 最高に素晴らしいお方が来られた！

イエス様は最高に素晴らしいお方です！ なんとたったって、この全宇宙と私たち人間をお造りになった、本当の神様のひとり息子なんですから！ つまり神の国の王子様です！

その神の国の王子様であるイエス様が、神の国から、私たちの住む地上の世界に降りて来て下さったのです！ スゴイ事ですね！ ビックリマークが止まりません！ でも、もしイエス様が神様の姿のままこの地上に來られたら大変ですね。そもそも目に見えないでしようし、もし目に見えたとしても、太陽よりもまぶしくて大いいかも知れません。

でも大丈夫。イエス様は神様の姿で來られたのではありません。勿論、動物の姿でも、植物の姿でもありません。もしそうだったらお話も出来ません。でもイエス様は、私たちと全く同じ人間の姿になって、しかも私たちと同じようにお母さんのお腹に來て下さったのです！ そのお母さんの役目を引き受けたのが、先週聞いた、マ

リヤさんですね。

### イエス様を迎えたのは

さあ、そのマリヤさんがお腹からイエス様を生み出す時が近づいてきました。ところがマリヤさんは旅の途中です。なぜかと言うと、その時代の支配者のローマ皇帝が皆の人数を数えるために、「自分の出身地に帰れ」と命令したからです。昔も今も、支配者というのは人間を数えたり、番号を付けたりにして管理したがるのです。

イエス様はそんな私たちの世界に来て下さいました。でもベツレヘムの町も、久しぶりに帰ってきた人たちでいっぱいでした。もうすぐ、神の王子様であるイエス様が赤ちゃんの姿で生まれようとしているのに、それどころじゃないと、ワーワーワー大騒ぎ。どこの宿屋も旅館も満員です。

私たちのために来られたイエス様を迎え入れる場所も、人もどこにもないのです。たった一つ空いていたのは、王様の宮殿でも、豪華なホテルでもなく、静かな家畜小屋でした。でも落ち着ける場所だったと思います。そしてイエス様が生まれた時、その家畜小屋は、天国の

ような安らぎと祝福に包まれた事でしよう！

### まとめ

私たちの心と頭の中はどうか？ 大勢のお客で満員だったベツレヘムの宿屋のように、心と頭の中がイエス様以外の色んな事で満員だったら、とてもイエス様をお迎えする事は出来ません。尊い神のひとり子イエス様がすぐ近くに来て下さった事さえ、全く気がつかないかも知れません。

イエス様を心にお迎えするために、そしてイエス様と一緒に生きていくためには、心を静かにする必要があります。目を閉じて、口も閉じて、手も、足も閉じます。そう、お祈りの姿勢です。そして心が静かになったら、イエス様にこう祈りましょう、「イエス様、私の心に宿って下さい。私の心の中にずっと住んで下さい」と。

♪主イエス様いつもわたしと♪ (PW8)

# 聖書 ルカ2・8〜20 テーマ 救い主誕生の知らせ

## 序論

(金井信生)

クリスマスおめでとうございます。神のひとり子であるイエスがこの世にお生まれになった夜、主の御使いは羊飼いに「民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と告げました。キリスト降誕の知らせは、喜びをもって語られ、受け入れる者に救いの喜びをもたらしませんでした。

## 一、届けられた喜び

マリアがイエスを生んだのは、ふだん住んでいるナザレから120キロメートルも離れたベツレヘムでした。それはローマの皇帝が出した人口調査の勅令に従うためでした。この世の権力者は、臨月を迎えて旅をしなければならぬ若い夫婦の苦労まで顧みてはくれません。力の強い者は、弱い者のために多少の配慮はしても、自ら労苦を負うことはありません。でも、神はそんな旅先で、救い主を生れさせてくださいました。私たちにつきまとい、とってくる不足や不安を共に感じ、共に負ってください、

そんな中でも喜びを与えるためです。

また、御使いの知らせを聞いた羊飼いたちは、当時人口調査の対象にもされないほどに身分の低い人たちでした。宗教家たちからは汚れた人々とみなされ、神殿に礼拝に行くこともできません。でも神はそんな羊飼いたちに、救い主のお生まれを一番に届けてくださいました。この知らせを聞いて救い主に会いに行こうとする心があつたからです。

身分のある人たちは、同じ知らせを聞いても動こうとはしません。イエスは「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である」(ルカ5・31)とおっしゃられました。神の目から見、霊的に健康な人は一人もいません。ただほとんどの人は自分が弱っていることに気がついていないので、神の呼びかけに応えないのです。

「あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである」(ルカ6・21)。神のもとに近づけない私たちのところに、神の御子が来てくださったのがクリスマスです。「私には神の救いが必要です。私を救ってください」と素直に求め、キリストのお生まれを私のための救いの知らせ、喜びの知らせとして受け

取りましょう。

## 二、歩みだす喜び

マタイによる福音書に、東の国から博士（占星術の学者）たちがイエスを訪ねてきたことが記されています。博士たちはイエスに会って何か優れた知恵をいただいたわけではありません。でもイエスを拝み、献げ物を献げました。羊飼いたちはベツレヘムに行き、乳飲み子を見つけました。一番に救い主に会ったからといって特別な恵みがあつたわけではありません。生活を豊かにしてくださうとか、願い事もしませんでした。献げる物は何もありません。しかし、神への賛美の思いにあふれて帰っていきました。

博士たちも羊飼いたちも、何かをもらったからでもしもらえたからでもありません。自分たちも神におぼえられていることを確かめ、これから生きていく中で神が共に歩んでくださることを心に刻むことができたことが大きな喜びでした。この喜びをいただいただけで、人生は新しくなります。

聖書が示している喜び、神の約束に基く喜びは「先取りの喜び」です。今日の前にあるのが困難でも、不安で

も、神の祝福の約束に立って、先に喜ぶことができるのです。インマヌエル（神は我々と共におられる）と約束されているイエスを信じ、神を礼拝することから、また一歩を踏み出していきます。

クリスマスはまことの礼拝の再出発です。かつて、シナイ山で主のご顕現（けげん）に触れたところから、イスラエル人の礼拝が始まりました。今度は神のひとり子がこの世に来てくださった、その事実だけで神を賛美し、礼拝するのです。博士たちが帰っていく東の国も、羊飼いたちが帰っていくベツレヘムの野も、今までと変わりはありません。でも主が共におられる信仰と喜びをいただいて変えられた人たちが帰っていきます。

私たちもイエス・キリストがこの世に生れてきてくださった幸いを心から喜び、クリスマスを人生の転機とし、また信仰生涯の再出発の時としてお祝いしましょう。これからの歩みに神の救いの約束が実現していきます。

## 結論

人生最大の喜びの知らせであるキリスト誕生を感謝し、まだ知らない人にも伝えて、共に喜びましょう。

## 研究資料

(宮澤清志)

## テキスト

8 救い主誕生のニュースは、最初羊飼いにのみたらされた。当時の羊飼いは、社会的には軽蔑されていた存在であった。彼らが律法の一点一画までも守るということは、職業柄無理だったからである。彼らには、人間が作った祭儀律法の遵守よりも、羊の世話が優先されたのである。

9 主の御使が現れ ルカはしばしば御使いの顕げん現げんを描写する。御使いの顕現は、同時に 主の栄光をもたらしした。栄光(ギ)ドクサ)は、神の臨在の顕現であり、主の現れそのものであった。しかし、あくまでもこの言葉は「主のドクサ」であって、この言葉が人に用いられる時には「榮譽」(Iテサロニケ2・6)、「面目」(ルカ14・10)となる。わたしたちは、あくまでも主の栄光を反射させる存在なのであり、決して主の栄光を人間が取ってはならないのである。非常に恐れた 直訳すると「大きな恐れを恐れた」の意味。これは10節の「大きな喜び」と対になっている。人間が主の栄光にさらされる時、人間の恐れが喜びへと変えられる。圧倒的な神の

栄光である。

10 恐れるな 直訳は「恐れることをやめなさい」。

伝える(ギ)エウアンゲリゾー) この動詞の名詞形が福音(ギ)エウアンゲリオン)であり、御使いの知らせる「大きな喜び」とは、福音そのものであることが分かる。

11-12 きょう ルカ文書に多く用いられている、救いの到来を表す終末的表現(ルカ4・21、5・26、19・9、23・43等)。救主…主…キリスト この幼な子は、まず

救主 であつた。幼子はこの称号のゆえに御使いによってイエス(主は救いである)と名付けるようにと指定されていた(1・31)。イエスの来臨の目的は人類の救いにある。同時に 主(ギ)キュリオス) という称号は、ヘブル語の「ヤーウエ」をギリシャ語に訳したもので、「わたしは在りて在る者である」という、永遠の自存者にして創造主なる神を表す名である。すなわちこの幼な子は旧約聖書に啓示された神の名で呼ばれているわけである。同時にこの称号は、時のローマ皇帝にも用いられていたが、ルカによると、この世の救い主として来られた方は、すべてのものの主であり、また同時に歴史の主でもあると語るのである。そして次の称号である キリス



ト(ギ)クリストス) については、ヘブル語の「マシーアハ」(油そそがれた者、すなわちメシヤ)のギリシャ語訳。旧約聖書に預言され、待ち望まれてきたメシヤが、時至ってイエスとして到来したことを表している。

12 しるし 救い主誕生のしるしとは、飼葉おけの中に寝かせてある幼な子である。飼葉おけの中に幼な子が寝かせてあるということは、通常ありえないことであった。それゆえ幼な子のしるしとしては十分であった。と同時に、ここに、全世界の救い主が地上の最も低いところと降りられた謙遜さ(ピリピ2・6～11)と、この世の王と対置された救い主の姿とが表されている。

13 御使いの福音の告知に続いて、天の軍勢の賛美が続く。軍勢 とは、軍隊用語が用いられており、文字どおり天の軍隊、天の大軍といった意味が込められている。

14 いと高きところでは、神に栄光があるように ラテン語で「グローリア・イン・エクセルシス・デオ」。地の上では、み心にかなう人々に平和があるように みころにかなう人々とは、「すべての民」(10)の言い換えであろう。もちろん様々な解釈がありうるが、主イエスにおいて、神がすべての人々をみこころにかなう者として下

さるのである。平和 アウグストの時代、「パックス・ローマナ」(ローマの平和)という時代が幕を開けた。ローマには平和と繁栄がもたらされようとしていた。しかし、この地上に真の平和をもたらしことのできる方は、アウグストの平和とは対照的な、飼葉おけに寝ているひとりのみどりごによってもたらされた。

15～20 これまでの救い主の誕生とその告知の場面に居合わせた三者の様子が描かれる。まず、御使いから主の降誕の告知を聞かされた羊飼いたちは、急いで行って、救い主の誕生の出来事を人々に伝えた。そして彼ら自身はこの出来事のゆえに神をあがめ、またさんびした。一方羊飼いたちからこのことを伝え聞いた人々は、この出来事を聞いて、不思議に思った。同じようにこの出来事を羊飼いたちから聞いたマリヤは、これらの事をことごとく心に留めて、思いめぐらしていた。イエスの降誕の現場に居合わせたこれらの人々の違いに心を留めたい。主の降誕の出来事を不思議に思うのみで終わってしまう人々のようであってはならない。このメッセージを語る「きょう」(11)、私たちの信仰の姿勢が問われている。

参考図書 12月2日分と同じ。



## 聖書

ルカ2・8〜20

## タイトル

救い主誕生の知らせ

## 暗唱聖句

きょうダビデの町に、あなたがたのために  
救主がお生れになった。ルカ2・11

## 目標

喜びの知らせであるキリスト誕生を共に  
喜ぶ。

## 導入

(土屋開夫)

皆さん、クリスマスおめでとうございます！

「クリスマス」というのは「キリストの礼拝（ミサ）」  
という意味です。ですからキリスト・イエス様を礼拝す  
るのが本当のクリスマスです！

ある先生が言いました、「世の中のクリスマスは、主役  
のキリストを忘れているから、クリスマスじゃなく、ク  
リス・マイナスだ」と。でもイエス様を信じる私たちは、  
キリストと一緒にいますから、「キリスト・イマス」です  
ね！ そう、イエス様は私たちと一緒にいるために、ク  
リスマスに来て下さったのです！

## 最初に知らせを聞いたのは

さあ、ではクイズです。

【第一問】救い主イエス様は、私たち全ての人間のため  
に神の国から来てくださいましたが、その知らせを一番  
最初に聞いた人たちは誰でしたか？

そう、羊飼いさん達ですね。では、

【第二問】なぜ最初の知らせを聞いたのは、羊飼いさん  
達だったのでしょうか？

これには特に正解はありませんけれど、自由に考えて  
みてください。さつきも言いましたように、父なる神様  
からの最高の愛のプレゼントである御子イエス様は、世  
界中の全ての人に贈られたのです。でも、その知らせを  
最初に聞いた「全人類の代表」が羊飼いさん達でした。

なぜでしょうか？ それはきっと、こういう理由じゃ  
ないでしょうか。一つには「イエス様はみんなの羊飼  
いとして来られたんですよ」という意味だと思います。

メーデー鳴く羊たちには、羊を大切にし、羊を守り、  
羊を導いてくれる羊飼いさんが必要です。それと同じよ  
うに、私たち人間にも、愛してくれて、守ってくれて、  
導いてくれる羊飼いさんが必要です。イエス様は私たち

の羊飼いとて来てくださったんですね！

そして羊飼いさん達が最初に知らせを聞いた、二つ目の理由は、きっとイエス様が来られた事を一番喜んでくれる人たちだったからだと思います。

例えば、もしあなたが学校のクラスで「今日、ボクのお誕生会をやるんだ。誰でも来ていいよ。ママがおいしいケーキも用意してるよ！」と誘っても、「行かねーよ。オレ、色々忙しいんだ」って言う子より、「ボクも行つていいの？ 行く行く、絶対行く！ キミンち、どこ？」って言うて来てくれる子の方が嬉しいですよ。

さっきも言いましたが、御子イエス様は、父なる神様からの最大、最高の愛のプレゼントです！ だってお父さんにとって一番の宝ものは子どもです。それ以上に大事なものはありません。父なる神様にとって最大の宝ものである、ひとり子イエス様を私たちに与えて下さるのですから、大喜びで「ありがとうございます！」って受け取ってくれる人に、最初に知らせたいと思われたのではないでしょう。

### 会いに行った羊飼い

その知らせを伝えたのは、主のみ使いでした。真つ暗

な夜だったのに、急に朝になったかのような、まぶしい光でした！ み使いは言いました、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」そしてその後、み使いの大軍勢が迫力の大さんびをしました。羊飼いさん達はビックリして、口をポカーンと開けたまま、しばらく動けなかったかも知れません。でも我に帰って、「さあ、見に行こう！」と大急ぎで、赤ちゃんイエス様に会いに行きました。そして「本当だ！ ボクたちの救い主だ！」と大喜びし、神様を賛美しながら帰っていきました。

### まとめ

イエス様のご降誕を喜んで、心から礼拝する人には、神様の最大の愛と祝福が与えられます！

「クリスト・イマス」それがクリスマスです！

♪いと高き所に栄光が♪ (PW19)

# 聖書 Iテサロニケ5・16〜18 テーマ すべてのことに感謝

## 序論

(金井信生)

テサロニケのクリスチャンたちが、救いの喜びのうちに歩んでいることを聞いて喜んだパウロは、なお主の再臨が近いことをおぼえつつ、主と共にある聖なる生活に励むように勧めました。そして最後に、誰でも、そしてすぐにでも始めることができる、具体的なこととして、  
「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」と教えています。

## 一、神の御心に従う

「いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する」のは、私たちが決めた目標ではありません。〈神があなたに求めておられること〉、すなわち「神の御心」です。神の御心とは、単なる願望ではありません。どうしても実現させたいという切なる願いであり、また計画です。天地創造以来、「神の御心」は必ず実現するべきものですが、ただ人間だけは自由意志を与えられ、神の愛に応えて自ら応答する責任が与えられました。

私たちが御言を通して示された「神の御心」に従う決心をするとき、実現に至るように励まし助けてくださるのも主の御計画です。

ノアの造った箱舟のことを思い出してください。神はノアに大洪水を予告され、箱舟を造るように命じられました。ノアは神の言葉に従う決心をし、神はノアに必要な大きさや材料を示されます。

私たちも、求められているのは、「はい、喜びます。祈ります。感謝します」という具体的な応答です。「喜び、祈り、感謝できる」材料も必要性も聖書全体の中に教えられています。

## 二、従うことができる

第一の勧めは「いつも喜んでいなさい」です。これは「どんなことでも喜びなさい」ではありません。自分の望まないこと、都合の悪いことは必ず起こってきます。その中で、「あなたはどんなときでも喜べるものを持っているのではありませんか」というのです。

ピリピ書は「喜びの手紙」といわれますが、書いている時のパウロは、年老いて持病に悩み、監禁されている状況に置かれていました。それでもパウロのうちにはい

つも喜びがあります。キリストによって救われた喜び、いつも主の平安に守られている喜び、やがて主の前にすべてが感謝に変えられる希望に立つ喜びです。

第二は「絶えず祈りなさい」です。この「絶えず」という言葉は、パウロが祈りに結びつけて何度も用いている言葉で、継続性を表わし、祈りをやめてはならないという意味です。

手を組んで目をつぶり、祈る時間そのものは限られているかもしれませんが。しかしここで命じられているのは、主との交わりを常におぼえていること、その表れが祈りであるということです。

とっさの時に、「困った、どうしよう」とか「誰か助けて」と口から出る前に、「主よ、困りました、どうしましうか」「主よ、感謝します」などなど、いつでも主が共におられる親しい交わりに歩むのが、「絶えず祈る」ことです。

三つ目の「すべての事について、感謝しなさい」は、あらゆる物事に対するわたしたちの受け止め方です。「どんなことでも神の許しなしには起きないのだから、まず感謝してみなさい。そうすればすべてが恵みに変わ

る」と教えているのです。神は愛をもってすべてを治め、私たちを救いと命に導いておられるのですから、この出来事も、神が私に与えられたのであり、私を祝福するためだと受け取ることです。

神は嵐を鎮め、困難を祝福に変えてくださる方です。ただ、感謝して受け取ることを知らなければ、その祝福を見ることができません。

### 三、感謝の土台

三つの勧めに共通している土台は「キリスト・イエスにあつて」ということです。この鍵をもっていれば、喜びと祈りと感謝が、いつも開かれています。

いつどんな時でも「キリスト・イエスにあつて」歩んでいるので「キリスト者」と呼ばれるのです。パートタイムではなく、フルタイム、キリストの愛のうちに住み込んでいるキリスト者にならせていただきます。主が共におられる幸いが、日々自分のものとなってきました。

### 結論

キリストの恵みをおぼえ、喜びと祈りと感謝に満たされて歩みましょう。

## 研究資料

(金井由嗣)

## 文脈

Ⅰテサロニケは全体として、主イエスに対する信仰の故の困難(迫害)に直面している信仰者の群れに対して、主の再臨を待ち望む信仰と、それに基づく聖い生活を勧める文書である。その末尾において、具体的な信仰生活に関する勧めと励ましの文脈の中で、この個所の言葉が語られている。この個所が「互いに慰め合い、相互の徳を高め」ること(11)、主にある指導者を重んじること(12)、弱い人を受け入れ励まし、一緒に善を追いつめるべきこと(14～15)という共同体を立て上げるための勧めに続いていることに注意したい。個人的な「喜び、祈り、感謝」の勧めではなく、主にある交わりと共同体を土台とした命令である。

14～22節の勧めの中で、「すべて」(ギ)パス」という言葉が繰り返し用いられている(14「すべての人に」、15「みんなに」、「いつも」、16「いつも」、18「すべてのことについて」、21「すべてのものを」、22「あらゆる種類の悪から」)。そのことは、10節の「さめていても眠ってい

ても、わたしたちが主と共に生きるため」との救いの目的の記述や、23～24節の「全く」「完全に」(ギ)ホロス)神が守って下さるようにとの祈りの言葉に対応している。従ってこの個所の命令は、再臨を待ち望むキリスト者が常に心がけておくべき生き方についての勧めの言葉であり、救いの事実と、救いを完成して下さる神への信頼を前提としている。

## テキスト

16 いつも喜んでいなさい 現在時制の命令形は、継続した動作や習慣を要求している。この動詞は二人称複数(以下同じ)。喜ぶことが我々の習慣となるまでに、神の恵みに満たされることを期待し、命じている。

17 絶えず祈りなさい 絶えず(ギ)アディアレイプトース)は時間的に「途絶えることなく」の意味で、前節の「いつも」と意味は同じ。現実には二四時間途切れることなく祈ることは不可能だが、そのようなことを命じているのではない。祈りの姿勢と習慣がつねに身についている状態を求めているのである。

18 すべての事について、感謝しなさい 感謝が基本的

な生活態度となることを求めている。すべての事について(ギ)エン・パンティ) は、動詞「感謝しなさい」の目的語ではなく副詞句。「すべてのことにおいて」、あるいは「あらゆる場合に」と訳した方が正確である。これが(ギ)トゥート) 三つの命令を単数形の代名詞で受けていることは、これらが全体でワンセットの命令であることを示している。「喜び、祈り、感謝」は互いに切り離すことができない。なかでも「祈り」は重要である。喜ぶこと、感謝することが難しい状況の中でも喜びと感謝が生まれるのは、そこに全能の主への信頼と祈りがあるからである(木下)。**神が求めておられること**(ギ)セラマ・テウ、直訳は「神の意志」。先の命令が神ご自身の意志(御心)であることが強調されている。また接続詞(ギ)ガル(なぜなら)が前後の文をつないでいる。信仰者が喜び、祈り、感謝の生活を送ることが神の御意志であるからこそ、パウロはこの命令を書き送っているのである。「神のみこころは、あなたがたが清くなること」(4・3)が、清い生活を命じる根拠とされているのと同様。**キリスト・イエスにあって**(ギ)エン・クリスト・イエス) 「神の御心」に直接かかる副詞句。

本書、またパウロにおける「キリストにあって」「主にあって」の用法からすれば、「キリストとの一体性において」と解釈することが妥当と思われる。**あなたがたに** 前置詞として(ギ)エイスが用いられている。「あなたがたに対する」、あるいは「あなたがたに向けられた」神の御心である。いずれにせよ、**神があなたがたに求めておられること** は、この場合、要求や命令ではなく、ましてや強制ではあり得ない。信仰者が「いつも喜び、絶えず祈り、あらゆる場合に感謝する」、その生き方を、だれよりも神ご自身が願っておられる。そして神は、キリストにおいてその御心をわれわれに適用し、われわれ自身の願いと行為において神の御心を受け止めるよう促してくださるのである。「喜び、祈り、感謝」は、キリスト・イエスにある恵みによって実現された神の意志に基づく、キリスト者の新しい生の現実である(松永)。

**参考図書** 小林和夫、遠藤嘉信、木下奉子(新聖書講解シリーズ)、松永晋一、L・モリス(ティンデル)、B・R・ガヴェンタ(現代聖書注解)、T・ホルツ(EKK)、F.F. Bruce (WBC)、G.D. Fee (NICNT)、J.A.D. Weima (Baker) 『ギリシヤ語新約聖書釈義辞典』。

## 聖書

Iテサロニケ5・16～18

## タイトル

感謝、感謝、感謝

## 暗唱聖句

すべての事について、感謝しなさい。

## 目標

Iテサロニケ5・18

一年の歩みを振り返り、そのすべてを神に感謝する。

## 導入

(飯田勝彦)

今日を入れてあと二日で二〇一八年が終わります。今日は、今年最後の礼拝です。今年も皆さんと一緒に神様の前に出て祈ることが出来ました。賛美をささげることが出来ました。また、一緒にみ言葉を聞くことができたことを感謝します。

皆さんにとってこの一年はどのような年でしたか？ 良い一年だった人も、悲しく苦しかった人も、この一年の最後、感謝の気持ちを持って終えることができたなら嬉しいですね。そして、新しい一年を神様に期待しながらスタートしましょう。

## 神様のみこころ

皆さんはよく「神様のみこころを行う人になりましたよ

う」と聞くでしょう。「みこころ」って何だと思えますか？

それは、「神様の喜ばれること」ということができます。皆さんも人から自分の喜ぶことをしてもらおうと嬉しいでしょう。そのように、神様も私たちが神様の喜ぶことを行って欲しいと期待していただくのです。ちなみに神様の喜ばれないことは何でしょうか。そう、罪です。神様は私たちが罪を犯してしまうことを喜ばれません。

皆さんは、お父さんやお母さんが喜ばないことをして、楽しいですか。楽しくないでしょう。私たちも父である神様の喜ばれないことをしても、ちっとも楽しくないのです。大好きな人に、喜んでもらえることは何かなと考えませんか。それと同じように、神様のみこころは何かと、いつも考える人にされたいですね。でも、いつの間にか「みこころ」が「ミー(me)こころ、(私)の心」にならないようにしましょう。

## 神様のみこころである生活

神様のみこころである生活は、どんな生活でしょうか。それは、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する生活です。皆さんは喜ぶときには喜び、祈れる時には祈り、感謝できる時は感謝する生活をしていると思



います。でも、今朝のみ言葉で大切なことは「いつも、絶えず、どんなことにも」です。皆さんは、いつも喜んでいますか？ 絶えずお祈りをしていますか？ どんなことにも感謝していますか？

生活をしていると苦しいことも悲しいこともあります。お祈りができないこともあります。また、感謝できないで不満を言ってしまうことも、もちろんあります。ですから、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する生活なんて「無理だ！」と思ってしまうんです。でも、神様のみこころは、いつも喜び、絶えず祈り、どんなことにも感謝する生活です。皆さんも出来ることなら、このような生活がしたいと思うでしょう。でも、「私達にはできないことを、どうして神様は言われるの」と神様に言いたくありませんか？ これは、私達には出来ないことですが、神様はちゃんとそれが出来るように力を与えて助けてくださるのです。

### イエス・キリストが秘訣

神様のみこころに沿う生活の秘訣は、18節にあります。皆さんで読んで見ましょう。「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神が

あなたがたに求めておられることである」。秘訣は、イエス様です。私たちは、イエス様にあっていつも喜び、絶えず祈り、すべての事に感謝できるのです。

皆さんもこの一年喜べないことがあったと思います。それを無理して喜ぶ必要はありません。喜べないこと、祈れないこと、感謝できないことは正直に神様に「神様、僕は喜べません！ 祈れません！ 感謝できません！」と言ってもいいんですよ。その時、思い出して欲しいことは、喜べないこと、祈れないこと、感謝できないことを全部知ってくださっているイエス様が共にいてくださっていることです。それを思うと嬉しくなりません。実際に嫌なことがあってもイエス様がこのことも知ってくださっているから喜びます。祈れないけど、祈れません！ 助けてくださいと祈ります。感謝できないけど、イエス様がこのことを知っていてくださるから感謝します。イエス様が秘訣です。

### まとめ

この一年もイエス様にあって感謝しましょう。感謝に満ちた生活には、喜びと祈りがあふれます。良いお年を！

♪主にしたがいゆくは♪（ホ87、イン85、こ53他）

# 牧羊ひろば



福岡教会 教会学校

昨年福岡教会に赴任して今年は二年目になります。福岡教会の教会学校は横田先生の長年の祈りと伝道の働きの実が結ばれている祝福された所です。信仰継承のために祈っているクリスチャンホームが多く、お孫さんへの信仰継承のため祈っている方が多いというのも特徴の一つです。もちろん求道者の家庭から来ている子どもたちもいます。求道者の保護者の中には大人の礼拝に行かずに子どもと一緒に教会学校の礼拝をささげる方もいます。

## ●日曜日の働き

福岡教会の教会学校は幼稚科、小学科、中高校（ジュニア）があります。時間の流れの順で紹介しますとジュニアの礼拝は9時〜10時15分、幼稚科と小学科の礼拝は11時〜12時15分の礼拝時間になります。



バルーンアート体験会

ジュニアは中高生向けのワークショップソングをよく歌っています。毎週礼拝後にはメッセージを聞いて恵まれたことや聞きたいことなど分かち合うとてもユニークな時間があります。この時間を通して先生たちはメッセージのフィードバックをもらうことができます。月一回は例会があつておいしい食べ物を作って食べたりします。

幼稚科と小学科は一緒に礼拝をささげます。子ども向けの賛美、みんなで出来るゲームを毎週しています。賛美とゲームを担当する司会の先生、メッセージを担当する先生がシフトを組んで毎週変わります。その日の先生によって雰囲気が変わることも楽しみです。分級の時間になると幼稚科と小学科が分かれます。幼稚科はまた違う先生からもう一度同じ聖書個所で幼稚科向けのメッセージを聞いて工作などをします。小学科はそれぞれの

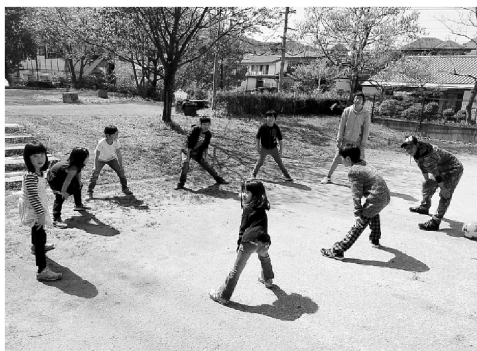


CSメッセージの劇

分級に分かれます。

月一回、教会学校の教師会では各科の近況や祈祷課題を分かち合って祈る時間を持ちます。そして次の一か月のメッセージや分級のための学びなどを行っています。

月二回スポーツミニストリーがあつて、近隣の公園で小学生のサッカーをしています。



スポーツミニストリー

### ●日曜日以外の働き

未就園児を育てているお母さんを対象にする子育て支

援クラブ（トドラ〜ず）が月二回、平日にあります。絵本の読み聞かせ、親子の手遊びがあつて、昼食では奉仕者のおいしい手作り料理を食べます。お母さんと子どもが良い時間を過ごしながら、自然にお母さん同士が話しくなり、教会にも心が開かれることに焦点を合わせています。

小学生の学習支援が毎週土曜日、中高生の学習支援が月二回・土曜日にあります。日曜日の教会学校に来て間もない子どもが学習支援にも来るようになったり、勉強が終わったら卓球などをして教会で遊んで帰ったり、教会が生活の一部になっていく様子が見られます。

## ●キャンプ

まずは夏のキャンプ。伝道の目的もかねて一泊二日、たっぷり時間をとって遊び、学びます。友達と一緒に教会に泊まれるこのキャンプを子どもたちは一年間待つそうです。三回のメッセージを聞くチャンスがあつて、朝のデボーションもあります。

春のキャンプはクリスマスチャンホームの子どもだけを対象にしています。今年のテーマはリバイバルでした。信

仰の成長のために、より濃いメッセージが出来ます。

韓国のチームを迎えての英語キャンプが夏休みにあります。去年の参加者は100人を超えていました。この時は未信者のお母さんに個人伝道が出来るチャンスです。

## ●祈りの課題

信仰継承のために、子どもたちのリバイバルのために祈りをお願いします。

（李舜鎬）



子どもクリスマス会

## おわりに

『牧羊者』二〇一八年度Ⅲ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。

教師養成講座はK G K副総主事の矢島志朗兄に「若者への宣教／真実な交わりと、聖書の生き方①」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は福岡教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします

## 『牧羊者』のご購読・ご利用について

\* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1～3年生向け)、C(主に小学生4～6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。  
信徒局 教会教育室 ホームページ  
<http://cs.jccj.info/>

\* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。  
神戸市兵庫区塚本通3-3-19  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-6611

|          |        |       |       |
|----------|--------|-------|-------|
| 聖書講解     | 石田高保師  | 小泉 創師 | 福井文彦師 |
| 研究資料     | 金井信生師  | 山田和幸師 |       |
|          | 宮澤清志師  | 小平徳行師 | 辻林和己師 |
| メッセージ例   | 金井由嗣師  | 加藤 満師 |       |
|          | 松浦みち子師 | 飯田勝彦師 | 土屋開夫師 |
| ワーク(A)   | 後藤 真師  | 和田牧子師 | 水野晶子師 |
| (B)      | 鎌野 幸師  | 吉田美穂師 |       |
|          | 山下大喜師  | 三輪直子師 | 竹崎光則師 |
| (C)      | 野勢かほる師 |       |       |
| 中高科へのヒント | 上森恭子師  | 田中裕明師 | 勝田幸恵師 |
| 子ども聖書日課  | 後藤健一師  | 三輪正見師 | 石田高保師 |
| フラッシュカード | 田中愛子師  | 金田ゆり師 | 小野淳子師 |
|          | 丹羽 遥姉  | 松浦あん姉 | 佐藤由香姉 |
|          | 後藤栄子師  | 加藤 満師 |       |
|          | 松浦あん姉  | 佐藤由香姉 | 後藤栄子師 |
| み言葉カード   | 加藤 満師  |       |       |
| ・イラスト    |        |       |       |
| ワープロ打ち込み | 多田豊子師  |       |       |
| 校 正      | 加藤 清師  | 中島啓一師 |       |

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

## 聖書教育教案誌 牧羊者 二〇一八年度 Ⅲ巻

二〇一八年一〇月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室  
企画監修 日本イエス・キリスト教団 信徒局 教会教育室  
神戸市兵庫区塚本通三三一九

印刷所 菱三印刷株式会社  
電話 (078) 575-5511  
FAX (078) 575-5511  
電話 (078) 575-5511

\* 日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み